

サンガー女史家族制限法批判

山本宣治

序

一九二二年八月イギリス・ロンドンに於て開かれんとする万国産児制限会議に列席せんとする途上、米
國産児制限會頭 (President of the American Birth Control League) マーガレット・サンガー女史は
我日本に來遊する事に定まつた。之より先、同年二月在サンフランシスコの日本領事は本國政府の訓令に
基づき女史の旅券に査証を拒み、暗に日本國土に上陸禁止せられるべき旨の予告をしたが、女史は之に屈
する所なく船中宣伝を続け、三月上旬横浜に上陸、内務當局は女史を召喚し、産児制限宣伝の公開演説を
ば日本帝國領土内に於て行わぬ様誓約させたとの事である。東京、横浜に於ける約八回の集會を終えて後
彼女は西下したが、突発した女史の病氣の為に改造社の計画に係る京都・大阪・神戸三都市の公開講演は
中止になり、唯前約のあつた京都市醫師會の為に特別講演が三月三十日午後四時から京都教會で開かれた
許りであつた。予は前に改造社の囑を受け女史の講演通訳をする筈であつた關係上、女史が三月二十九日
入洛(京都到着)の日から四月二日出発の前迄、改造社、京都府醫師會の所用以外に予自身の問題に關して前
後三回、約二時間會談し、尚又上記の醫師會の講演では會後実物指示の際、若干医学的の事項の通訳を試
みた。予の「サンガー學」は大抵此會談によつて得た所の事を基礎にして居るのである。

彼女は四月二日下洛(京都出發)し神戸を経て門司に至り、四日終に日本本土を離れて朝鮮に入った。思う
に彼女の日本訪問は我日本の新マルサス主義に執つて二期を画する出来事であり、且又何事も米國が世界
第一と自認する彼女の米國氣質に對して或種の刺戟を与えたに相違ない。一中輾(女の頭の飾り)の身を以

て所信を世界の前に宣伝せんとする勇氣に我々は学ぶ所が多い。而して彼女を通じて潤沢なる過剰エネルギーを有する大国民、即ち我等の尊敬するアメリカ合衆国民に対して敬意を表せざるを得ない。而して之と同時に吾人は此女史の来朝と共に吾人の文化の特殊な立場に就いて考えさせられた。我日本人も新し物好きの点に於て決してアメリカ人にひけをとらない。学問上の新説と技術上の新発見は、場所によつては西洋の場末や片田舎よりも早く我国に輸入されて居る。唯其「走り」の代物が一局部に秘蔵されて居る為に、新聞雑誌の編輯者の拾い上げる迄は決して世間一般の問題となり得ない。シュタイナー然り、アインシュタイン然り。併し乍ら我等のサンガー女史は、雑誌に充分意見を發表して居る間はさのみ問題とならなかつた。例、

マーガレット・サンガー（一九二一年六月）「情慾産児制限の哲学」約二十頁、『改造』第三卷第六号
 然るに一朝彼女の来朝となつて急に我日本の智識階級の好奇心は異常に峻られた。何の原因であるか特に指摘する必要も無い。唯京童の短句を以てして「世間には極道し足らぬ連中も居るもんやなあ」と云えば事が足りる。扱て余談はさしおき、彼女は戦勝將軍の如くに堂々と横浜に上陸した。滞京数旬（数十）東京の有識者は多少の興味を惹いたが、大正の黒船騒ぎは漸くに静まつて行つた。三月末彼女の西下に際して彼女の動靜を知る者は其行く先行く先の高等警察のみであつたといつていい。京都・大阪・神戸では全く公けに口を開かなかつた、否開かせなかつた。其れは世の想像するが如く官憲圧迫のせいでない。彼女を思う友人連の忠言と時機を知る彼女自身の聡明に拠つたのである。丁度其時恰も、

マーガレット・サンガー（一九二二年四月）「婦人の力と産児制限」十三頁、『改造』第四卷第四号
 の發表があつたが、最早余り興味を惹き起さなかつたのも、単に日本の智識階級が飽き易いから許りでは

ない。斯かよう様にして彼女は他意無く保津川下りと夜桜と都踊りの見物に京都の数日を送り、更に神戸に転じ、それから関門埠頭ふとうに於て新聞記者に多少苦味を含んだ別辞を吐はいた後、朝鮮をへて支那に向うた。来るや將軍ごとうの如く、去るに際しては処女の如きあわただしい彼女の去来の跡を見るに當つて種々の感想が湧わいて来る。

予は彼女に求むるに我日本に対する忌憚きたん無き批評感想を以てした。外交巧妙なる彼女は言を左右に托たくして其れを避けた。併しかし近き将来に於て吾人は、支那から或はイギリスから彼女の日本觀を聞く事を期待して居る。予の此批判は彼女の其日本觀に対する一の参考資料となるう。予が之から試みんとする批判は「サンガー式手品の種明かし」である。多分明けてくやしき玉手箱であるかも知れぬ。某医学博士は彼女の小冊子を一読して「従来医師間に周知なものの許りほかで、何等なんら新しいものも奇抜なものもない」と云うた。実に其通りである。併しかし乍ながら其玉手箱も明けて見る迄は、もしやと我々の心はときめいた事を否定は出来ない。あけてみても我々は心的平衡を失わないか、其内容を逐一精査して見よう。

次に全訳を試みるのは“Family Limitation”と題し、一九二〇年第十版の約四六判二十二頁の小冊子である。労働者階級の婦人に対する直接宣伝用として記されたもので、我々の手を経て日本語に直すと割むつに六ヶしいものになるが、大体英語は極く平易である。斯かよう様な著書を直接に婦人達に渡して理解を求め得られる程度の文化は、確かに羨うらやむべく又恐るべきものと思わざるを得ない。

所が元來其れが宣伝用のものであるから所々省略しようかとも思うたけれ共、本来、予の批判は専門の医師諸氏を相手とし、応用生物学上の一問題の純學術的研究であり、而して此印刷物は以て印刷代贍とうしゃ写の非売品であり、學術講演大要として或特定の人のみに配付されるものであるから、一般公刊印刷物に伴う

如き危険性は無い。だから却つて全訳の方が米国の民情をしのびサンガー女史の面目を思い浮べる為に適切であろうと考えて、抄訳にしなかつた次第である。尚会谈によつて其以外に彼女から聞き知つた事柄は、夫々適当な個所に於て「訳者註」として追記してある。

尚此批判は、サンガー女史の主張の中で純医学的方面のみを取扱つて居る。社会学的方面の主張は日本語で書かれた女史の二論文（前掲）の外に、

山川菊栄（一九二二）「女性の叛逆、精神的及び物質的方面より見たる産児制限問題」十頁、『解放』
新年号

は紹介頗る其要を得て居る。尚此方面に関して諸説を網羅した最新の良著は、

安部磯雄（一九二二）『人口制限論』実業之日本社

が便利である。

以上の社会学的考察を離れて、主として人口問題の医学的研究に資せんと欲する人に対し、下の如き最近の文献を紹介する。

Placzek (1918) : Künstliche Fehlgeburt und künstliche Unfruchtbarkeit, ihre Indikationen, Technik und Rechlage. S. 450, Leipzig.

之はプラチェックが編輯し、臨床家、法医学者、政治家等が分担したもので、人工流産と人為的生殖能力剥奪の事を説いた約四百五十頁の大著、新マルサス主義と優生学的施設との関係にも触れて居る。

Marcuse, Max (1917) : Die eheliche Privatverkehr, seine Verbreitung, Verursachung und Methodik. Stuttgart.

之は家庭家庭に就いて産児制限を實行して居る所の方法・継続期間・其結果等を約三百例も表示してある。化学的殺精法が案外頼むに足らぬ点などありあり示されて居る。

同右 (1919) : Die seznologische Bedeutung der Zeugunges- u. Empfängnisverhaltung in der Ehe. Stuttgart.

之は大戦中及び戦後のドイツに於ける産児制限に就いて述べた短い講演で、概括的に実状を知るに要を得て居る。

Doléris et Bouscatel (1918) : Neo-Malthusianisme, Maternité et Feminisme.

両氏の論文集はカトリック教会に属する思想を代表して居り、フランスの人口漸減ぜんげんを憂いては、日本の民族的膨脹を理想的だと推奨して居る。右傾的著書の代表作。

家族制限法

マーガレット・サンガー

序説

今日米国の婦人労働者の間に於て、産児制限に関する智識の要求は前よりも更に切迫したものとなった。抑々世界大戦が我々に身にしみじみと悟らせてくれたのは、我等婦人即ち人の母たる者共が人命を安価な物とさせて居る限り、何所の政府でも皆各々其国民を追立てて戦争の淵に沈める事を依然継続するであろうという事である。

婦人労働者の人生を斯くもつらいものとなし、永久に貧窮と困苦の中に沈めて置くのは外でも無い、数え切れぬ程の大軍をなす赤ん坊、しかもほしくもなかった子供の群である。労働階級の女は兒を産んでも、養う事も着せる事も世話する事も出来ない。其様な時、其様な子を産むのを予防するに必要な智識を得させないのは国家であり、しかも此国家が産児の義務を彼等に負わすとは、誰しも母たる者は内心不都合に感ずる事柄である。彼女はあらゆる力を絞る、もがきにもがいて此事を拒んで居る。引つ切り無し休み無し妊娠という此重荷から自己を解放する為、我米国の母達を助ける為、此冊子に記された少し許りの智識がある。之を見て悦ぶのは彼女であろう。

私はフランスとオランダの勝れた医師から材料を得、誰にもわかるように極く素直な英語で現わそうと試みた。

妊娠予防の器械で私が説き及ぼさなかつた物が数多ある。其等に触れなかつた理由は、主として其れを用いて供して見た経験を有する人に私は個人として逢うた事がなかつた、或は其等を充分に満足な物としてお勧めが出来ないからである。

此小冊子に通りの智識がある。若し之に従えば、子をほしく思う時でなければ妊娠を予防するに足りるに充分だと私は思つて居る。

訳者註 以下に所々註を下した通り、斯様な方法とても全然奏効適確という訳でないから、全く充分だとは云えない。今

日の避妊の技巧は行わぬよりもまし位の程度で、充分の智識と注意を以てしても尚、時に予期しない妊娠が起る事が屢々あり、従つて未婚の男女で悲劇が起る事もある。医師と予防薬等に過度の信用をおく人々に此事は篤と教えて上げる必要がある。

若し女が自分の体を洗い清めるに際し無精であり、そして男が性交必然の結果を顧みない程利己的である時には、避妊法を発見するのは六ヶしかろう。

勿論、点薬や洗滌の為に起るのは邪魔臭い。月経の日取りを苦にするのは厄介である。性交に先んじて子宮栓や座薬を挿入するのは非芸術的の爺むさい仕事である。併し乍ら若し何年かたつた後、ほしくも無い子供を五、六人も控えたとし、此哀れな子供達は腹をへらし襤褸を纏つてあなたの裾にまとわりつき、あなた自身は前に女一疋であつた其面影も留めぬ程やつれ果てたとすれば、其れは前の事よりも遙かに爺むさい事なのである。

斯様に重大な衛生上の問題に関して情に脆過ぎてはならぬ。あなたの子宮へ男の精虫が入り込む事を防ぐのでなければ、所詮妊娠は免れられない事実となる。労働者階級の女達殊に賃銀労働者は多くても二人

以上の子を持つべきでない。世間一般の労働者として男親は二人以上養う事は出来ない、女親は二人以上の児を世話してサツパリした風をさせておく事は出来ない芸当である。私の経験によれば二人以上の子供が實際要求されたのでなく、唯行く先の分別が足りないか又は妊娠予防の衛生に無知であつた為に、余儀無く「子沢山」になつた次第である。

世の中にとありとあらゆる監獄や病院や工場や癩狂院や赤ん坊の墓を充たす為に子供が続々うまれて来る。此子供達が娑婆に現れて来るのを遮る法も知らずに居るのは労働者ばかりである。

労働者階級の婦人達よ、妊娠制限は今日あなた方自身を助ける唯一直接の方法である。

此知らせをあなた方の隣人に与え、尚同輩たる協力労働者に知らせてほしい。次の知らせの中で或一人の女に特に有益な事は、抜書して夫々廻して貰いたい。此重大な智識をあまねく世に広めてほしい。

婦人達に一看護婦が与える忠告

避妊を望む婦人は誰でも此忠告に従われると宜しい……。

月経が起らないかと、起る迄待つ許りでは宜しくない。是非起るように気を付ける事があなたの義務である。

若し例えば或月の八日に月経がある筈だとすると、八日迄唯今か唯今かと待つ許りではよくない。先ず早くも其月の四日から便通を宜しくする為に良い下剤を服用し、尚其服用を毎夕一回八日迄お続けなさい。子供を生むに適する迄は妊娠を拒む丈の思慮のある女達は、月経循環の日取りに就いて確かな記録を取つて居るものである。即ち曆か表を造りて最近の月経の日の印をつけ、尚又次に起るべき筈の日取りを

印しておくといひ。

女達は自身の体の事を弁へ、変化がキツパリ定期か不定期かを知っておかねばならぬ。世間普通ならば月経は二十八日目に来る、でなくば多くの若い娘達に於ける様に三十日目毎に来る。

訳者註 「Ostetich に拠れば六八%は定期、三二%は不定期に起る」 Havelock Ellis

其所で其日付をあなたの表にお書きなさい。記憶に信頼したり当て推量許りではいけない。

此重要な事柄を好い加減にやり放しにしておくのは、ひたすら無知と冷淡のせいである。

若し女が自分の月経期に入る前に、注意をするならば、先ず大概は決して面倒の起る心配はない。併し自体をおろそかにして「めぐりがくる」迄待ち受けて居る許りだと、多分面倒な事が起る様な事になる。

若し月経の分泌物が流れ出る徴候無く一週間も過ぎ去つた時には、大抵妊娠が始まったものと思つて差支えない。否思つた方が安全である。

男から精子を受けた卵の發育に何かの干渉を試みる事を墮胎と云う。

次第によつては墮胎も理の当然である場合も数多ある。之は誰も疑ふ事は出来ない。併し若し予め、妊娠、予防の用心をしたならば、墮胎などは全く無用の沙汰となり終る事にも疑いはない。

妊娠制限が墮胎に対する唯一の療法である。

妊娠せぬ事請合の安全期は無い

月の或時期又は月経後或間に丈受胎するといふ考えが民衆の間に行われて居る。例えは月経開始後十日以内と月経開始前四、五日以内とかに限つて妊娠するものだといふ考えである。

訳者註

現に我日本で性慾売文成金某博士の著書の或箇所にそう書いてあるが、大うそである。其証拠 Bloch, Iwan : Das Sexualleben unserer Zeit を見よ。尚更に戦時中に得た新材料を以てした証拠は Siegel, P. W. (1917) : Gewollte und ungewollte Schwankungen der weiblichen Fruchtbarkeit. Bedeutung des Kohabitationstermines für die Häufigkeit der Knabengeburt, S. 47 269。

こんな考えは丸きり信用出来ない。現に或女達は月の何日にでも受胎した事が幾度となく立証されて居るのだ。此考えには少しも学問上の根拠が無いのだから信頼してはいけない。尚又兎に乳をのますと月経開始を数ヶ月延ばして妊娠も起らないという説がある。併し此説にも余りもたれ過ぎるのはいけない。殊に分娩後五ヶ月を経て後は尚更の事。即ち屢々何も「見る物を見ず」に妊娠する事もあり、且妊娠の自覚も無く妊娠する事がある。其時に彼女は一兎に乳をのませ、他の一兎を胎内子宮に有する次第であるが、何か妊娠予防の手段を講じなさい。

中絶性交 Coitus interruptus

コンドーム(即ちサック)の使用はさておき、其外の避妊法で最も普通なのは中絶性交である。云いかえれば精液発射の少し前に膣から陰莖を除去する事である。此法は確かに十分安全な一法に相違無い。以前に二、三の大家の考えた程其れは男にとつては危険でないと考えられて居る。併し膣内に幾らかの精液を残さない内に引退いたという事を確かめるには、男の方に頗る強い意志の力を必要とする。そして果して思う通りに行つたかどうか之を決定するのは甚だ困難である。此法に対して最も不都合な差支えは女の神経状態に及ぼす悪影響である。彼女が自分の享樂を完結しない時には、彼女の心身に満足の瀬

戸際迄漕ぎつけて神経は極度迄緊張する。そして此物足らぬ状態に其まま彼女は取残される。此事が女に害を生じるのである。互に満足する性交は普通の女にとつて大きな利益となり、性交の生ずる磁気が彼女に健康を与えるのである。若し女の側で性交を望まない、又感応しない時に性交を行うては宜しくない。たとい現世の結婚という形式が売淫でないと保証した所で、矢張斯様な交わりは売淫であり、女のこまやかな感じを墮落させるものである。男の側で引退く事の代りに女に害を与えない何かの手段を講じるといい。

訳者註 一般に婦人に於て性交快感の頂上 Orgasmus は男子に於ける其れよりも遅く来るを常とする。だから夫妻相互の理解調整が必要である。女の性交慾（生殖慾とは別物）欠乏の多くは男子の無理解な利己的態度に基づく事が多く、享樂中絶の為に起る女側のヒステリー症は可成多い。最近の性学研究上の一問題は之に關係して居る。

参考文献

- (1) Adler, Dr. Otto (1919) : Die mangelhafte Geschlechtsempfindung des Weibes, 3. Aufl., Berlin.
- (2) Hirschfeld, Dr. Magnus (1920) : Sexualpathologie, III. Teil, Störungen im Sexuals offwechsel. Bonn.
- (3) Stopes, Dr. Marie (1919) : Married Love. A Book for Married Couples. 9th Ed., London.

洗滌は唯掃除だけ、避妊法でない

消毒薬で洗う事は避妊に於ける重大な一要素であるが、其法ばかりで避妊の効を奏し得ると信じ過ぎてはよくない。洗滌薬は唯清める丈で、唯其れのみを信ずるに足る避妊の一法と推奨してはいかぬ。予めゴム製子宮栓とか又は座薬の含有物とかで子宮孔を蓋うて置くのでなくば、既に彼女が床から離れる前に、或は洗滌に赴く前に、妊娠状態が始まる事もあり得る。此様な事柄は妊娠受胎の順序を知つて居る人

には一度考えればすぐにわかる事である。

が何にせよ女たる者は誰でも膣洗滌ちつせんじょうによつて自体を全く清潔にする事を学ぶべきである。座薬は摩擦刺戟を減ずる結果があるからとて其使用に反対する婦人もある。併し座薬挿入に先だつて塩湯を用いて局部を充分に洗滌せんじょうし、既に器官内にある分泌物をすっかり掃除すれば、如上の欠点も幾分は補おぎなう事が出来る。

冷水洗滌せいしじょうを勧める事は出来ない。即ち冷水ではゾツとする、して又神経系に打撃變動を起す傾きがある。温液又は微温液使用が望ましい。

フランスの田舎では女が石鹼湯を用うるので、唯ただ有り触れた通常の石鹼を湯に溶かして性交の直後に使用する。

若し浴室の設備がある時は、性交後すぐ其所そこへ行つて洗滌液を準備し、浴槽せんじょう（註、洋式のは仰臥して体を浸す丈程の湯を充たした小判形の器、大規模にした「おまる」）に入つて仰臥する。そして袋形洗滌器せんじょうを其頭上に吊し、洗滌用液を充分に腔内ちつに流し込み、以て性交の折残された精液を洗い出すがいい。

洗う際には洗滌管せんじょうと一所に人差指を挿入し、腔の内膜の壁から精液を洗うのに容赦はいらぬ。やつて見れば指先の感じで充分に清潔になつたかどうかは直ちにわかる。世に伝うる所によれば、世界中で最も完全な洗滌せんじょうをなすのはフランスの女であり、其行為は局部を清潔に健全な状態にあらしめるに有力なもの、且かつ又卵に合する為に子宮に入り込まんとする精子を遮る役に立つのである。

若し浴室の設けがなければ洗滌せんじょうは便所で行うといい。之も不可能ならば盥たらいを用いて腰湯を行えばいい。

訳者註

斯様な事が孰れいずの家庭に於ても行われる為には、一般に医学智識の普及と日常生活の科学化を前提とする。日

本の文化の現状を以てして此様な米婦人の説に接する時、うた転た感慨無量である。

洗滌用液体

次に掲げる物は、注意して用うれば精虫を殺し或は其れが子宮に入る事を防ぐに足る洗滌用溶液の數種である。

リゾール——褐色油状の液体で、水に加うれば清い石鹼様溶液となる。コーヒーを飲む時の一杯匙 (Teaspoonful) を一升二合 (約二・二リットル) の温湯に加えれば、よい洗滌液が出来る。囊ふくろに入れる前に壺か鉢はちの中で搔交かきませぬ。

Bichloride——青色又は白色の錠剤を薬屋で求めるといい。青のが有色だから他の物と誤る様な危険は少ない。溶液をば囊ふくろへ入れる前に、硝子器ガラスか陶器の瓶鉢びんはちの中でよく交ぜなければならぬ。囊ふくろへじかに錠剤をほうり込んでではならぬ。避妊の為には此錠剤一個を一升二合の水に溶かしたものが可成かなり強い溶液となる。

過マンガン酸加里——ちゅう膿流出液がある時には特に之が良洗滌剤になる。唯此物ただが不都合なのは衣服と皮膚を染める点にある。結晶したものが市場にあるから小匙こさじ半分丈だけ其れをとり、一升二合の水に溶かせば適度の強さになる。

食塩溶液——食卓専用の食塩をスーわね用大匙おほさじに四杯とり、之を一升二合の温湯又は冷水にすっかり溶かす。之は安くてよい洗滌液である。

酢——ヨーロッパの農民の多くは専ら酢すを消毒剤として用いる。一升二合の水にコップ一杯の酢を加え

るのが適量。酢は林檎酒の酢が望ましい。其使用の後清水で洗滌せよ。

冷水洗滌——何等消毒薬の使用なく共、冷水洗滌丈で可成有効に精液を除く事も時々ある。但し膈内腔の壁の中に精虫が隠れる事もあり得るのだから、冷水を加えても唯精虫の行動を暫時妨げる丈に止まる事位で、体温ですぐに暖められると精虫は卵に合せんが為に其進行を継続するのである。

女たる者は約一升二合入りのゴム製洗滌器即ち浣腸器を持つて居るべきで、其れを充分高い所に吊して不絶一様に直接流出せしめよ。

渦状流出をするゴム球洗滌器は消毒液注入用に用いられて多数の婦人の満足を得て居る。使用法説明書は現品に添えてある。

或婦人は避妊剤として性交以前に洗滌を行う事もある。其際には硼酸・明礬・枸橼酸又は塩酸キニーネの如き収斂剤を溶液としたもの方がいい。性交前ならば約三合(約〇・五)の溶液で充分、但し性交後更に多量を用いて洗滌を必要とする。之は又普通の消毒液で済ます事が出来る。

コンドーム(所謂サック)の使用

性交直後消毒液を以て生殖孔たる腔を完全に洗滌する時、熟練したやり方であれば精虫は殺される、そして其以上何も無用だという事に少しも疑いも無い。

訳者註

「少しも疑いも無い」と断言するのは確かに乱暴である。襞の多い膈内腔を完全に洗滌する事が如何に困難であるか、訳者の喋々を俟たず共専門医家には釈迦に説法であろう。訳者は女史と対談の際此点及び其他に就いて米国式樂觀の甚だしきを指摘しておいたが、依然其樂觀的態度を棄てなかつた。

併し乍ら消毒液が精虫に到達しない内に精虫が子宮に既に入り込むという事も始終あり得る話、だから精虫と卵との間に隔膜を挿入して両者の接触を防ぐのが更に安全な法である。其為の器として最良な一は彼のコンドーム即ちゴム製サックである。

コンドームは軟かい膜で造られた陰莖を全く包む袋で、其内に性交時に出た精液を貯える役に立つから、其所で精液は腔に入らない。

コンドームは何所の薬屋でも買う事が出来る。其価は上等下等で様々であるが、膜はゴム製又は獸腸加工品で、縫目無く薄く弾力性を具えて居るが、尚其質が粗剛である。使用調整其宜しきを得た時には破れない。之の使用に対して主なる反対は其破れる事の恐れにある。射精の折陰莖の膨脹する為にコンドームに充分の余裕を与えておかぬと、膜は破れ易くそして精虫は矢張り子宮に進入し、其女は受胎の自覚無しに妊娠する事がある。他面に於てコンドームの按配に注意し余りに密にはめる事が無い時には、其れは避妊並びに性病予防の目的を兼備する最良法の一である。性交終了後陰莖撤退の際、充分注意してコンドームが剥け破れない様に注意しないと、腔内に精液が入る恐れがある。

訳者註(一) 女史が齎した器具類(コンドームは無かった)は皆、何所の薬舗でも何人でも買い得る物であるとの話。但し大規模の郵便注文商店では絶対に取扱わない。其故はComstock法という郵便法があり、斯かる種の商品の郵送を厳禁するからである。

因みに女史は此種の器具が日本でも盛んに作られ、しかも盛んに海外に輸出されるといふ顕著な事実を、訳者が語る迄は知らなかった。蓋し何事にも世界第一と斬新を誇り、しかも他国文化に歴史的背景と特殊な発表形式がある事に気がつかぬ無邪気なアメリカ氣質の然らしむる事であり、あれ丈東京で識者連と接触しておき乍ら、日本に女性運動(参政権要望、男子の密通の処置請求、男子の健康診断提唱等の特に立法的方面)を訳者が教える迄は全然知らな

かった。之などは彼女として呑気も呑気、迂潤も甚だしいものと云わねばならぬ。又同時に内弁慶、外幽霊な識者諸先生の怠慢の責も幾分免れないが……。

訳者註(三) 羊や鮫などの盲腸を脱脂精製した Fischblas Kondom なる物は、大戦前我国にも輸入されて居たが、之は多少高価な代りに反復使用に耐え、且動物性のものであるからしなやかで、普通のゴム製品の如く享樂を殺ぐ事は甚だしくない (Forel, August (1920) : Die sexuelle Frage. 13. Aufl., München に拠る)。最近輸入されて白木屋薬品部に売られてある物は多分乏しいが、訳者は未だ実見しない。

一回使用後のコンドームは棄てる方がいいが、併しいつもそうは行かぬから、其時は消毒液にコンドームを浸してから乾かし、将来使用の為に貯えればよい。

訳者註 此注意は獸腸製のものに丈適用される。メイド・イン・オーサカの品には無論無用であるが、世間には随分儉ましい人もあり、或小学教員は反復使用の為垣根に乾しておいたが、風に吹き飛ばされて子供の拾う所となり、玩具の風船として玩ばれて両親を苦笑せしめた例を聞いた。

コンドームは米国でもよく知られた避妊法の一であり、避妊という主なる目的以外更に他の価値ある目的、即ち性交に際して男が女よりも速やかに「快感の絶頂」に到達する傾向を減ずるに与つて力がある。

訳者註(二) 京都での講演後の某質問者の所謂「おなごさんの楽しみ」であるが、医学上 Orgasmus なる術語がある事を添記するのも強ち老婆心であるまい。

性交に際し夫妻諸共同時にオルガスムスに到達するという風に、交情円満、完全な配偶関係はそうそう多いものでない。大抵男の方がオルガスムスに入る方が早い。従つて彼は其性交中、其以後彼女の要望を満足させる事は出来ない。此時に當つて彼女の神経の状態は極度に迄緊張して居る。そして医学の大家連

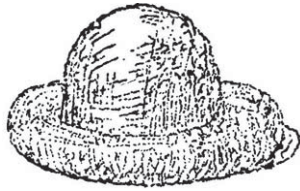
の説に拠れば、斯様な性的不満の状態が継続すると彼女の性的器官に病気が起り、又同時に性交に対して甚だしい嫌悪恐怖の念が彼女の、心中に湧き出るのである。

訳者註 性交に際して相互調整を欠いた結果、婦人側の快感未完結の為に起る神経系の攪乱及び継続的障害の生ずる事は真実である（参考文献は一一頁の註参照）。日本婦人の所謂血の道も其幾分は之に起因するものがある。性的啓発運動に於て勇敢なる訳者は此事を我日本の姉妹に伝えたいと切望する者である。併し御上品なる御婦人向きの講演で卒直な科学者の説に耳を傾くべく婦人は余りに臆病である（現に客年七月京都市小学校教員第四連台会で、二、三の女教員は講壇から聞かされる話が猥褻だとして慎然と席を蹴つて起ち、次日の予の講演には全然辟易して来なかつた）。予の話が婦人心理を弁へぬブツキラ棒である事も其一原因であるが、又一方に於てロツツエの云うが如く「女は分析を厭うから真偽の区別が出来ない。そして分析は多くの虚偽を暴露するから、女は自己分析される事を好まない」せいからも知れぬ。事實は事實であり、何も其自身に猥味は無い。唯見る眼、聞く耳其物が猥褻なのである。性的事項であれば何事でも猥味を発見する能力がある道学者と中学生と警察官の感ずるがままに、現状を放棄して置くならば、日本婦人のヒステリーと家庭悲劇の続出を防ぐ事は出来ない。性研究者たる訳者は専門の医師でない為に、且又卒直勇敢な青年科学者である為に、此重大な智識を婦人に伝える事の六ヶしいのを自覚して居る。だから当面の急を救う為に、夫たる男子を通じて此事を知らすより外の法はないと思つて居る。併し乍ら此小訳著書の読者たる専門医家諸君は、一般家庭の信頼も厚く又婦人心理をよく理解して居られる士だから、夫や親を通じて共直接之を婦人連に知らすのに困難は感じられまい。医師の言に信頼する事厚い本邦の民衆は、特に諸君の判断助言を尊重する者である。故に予は此機会に於て其状を特に述べて臨床医家諸君の大なる責任觀念に訴えて見たのである。

悪気の無い男が数百千人医師の門を叩いて、彼等の妻の性交欲皆無又は冷淡である事の原因を訊するのであるが、斯様な場合、十中八、九迄は皆夫の罪、即ち男の無知と我儘と思ひやりの無い所から、唯自身の慾を充たしさえすれば早速グーグー高射を発する事から起るのである。妻は高ぶつた神経を持ち乍ら寝も

やらず永い一夜を明かす事を避ける為、自衛の必要上性交に興味を有する事を拒み、其れで健康を保つ法を覚え込んだのである。コンドーム使用は屢々此難問題の解決に多少力がある。此様な事柄に就いて全然予備教育を欠いた娘達が多く世間にあつて、性交の生理に関して何の考えもなく、初めて精液の接触を経験した時非常な嫌悪の念を生じ逃避を試み、其打撃より回復するに暫く手間取る人もある。之は其娘自身の教育に關係する事が多いが、尚其性交當時に於ける男の態度如何に關係する所が更に多いのである。

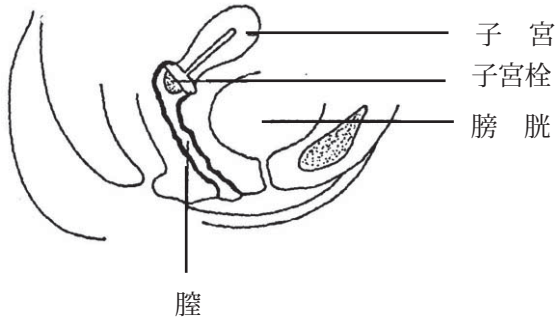
ベッサリー 子宮栓



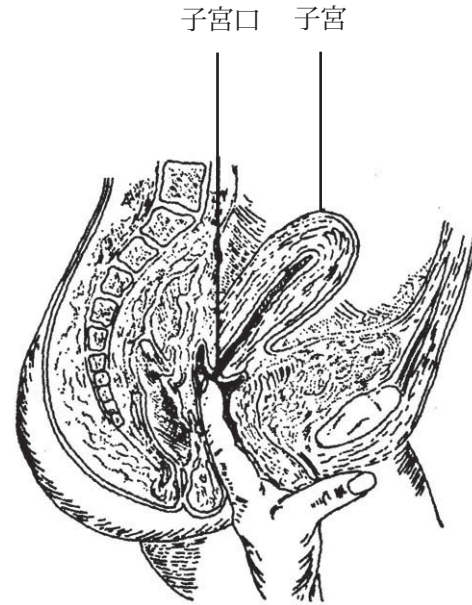
子宮栓
Pessary

避妊法の他の一形式はベッサリーで、之はフランスで最も普通な避妊法の一、米国では上流、中流の階級でよく用いられて居る。前はフランスから米国に輸入したものだから、一個七ドル以上もしたが、近頃は米国でも製造せられるから一個二ドル以上で手に入る。大きさは大形、中形、小形の三通りある。

大抵中形で宜しい。小形のは特に小柄の婦人にのみ適し外れ易い。私の考えでは、よく適合した子宮栓は最も確実な避妊法の一であると思う。私は個人として之を多年使用し充分な効果を納め得た多くの女を知つて居る。唯面倒な点は多くの女達が自体をこわがって、其構造を丸切り知らぬ事から起る。彼等は愚かで、子宮栓が体内深く入り込み過ぎて困るとか、或は何所か行方不明になるとか心配して終に捨ててしまう。併し其れが子宮内に入り込む事もなし、なくなる心配もなし、唯調子が悪ければ外へ由て来る許りである。そして若し適當の場所から外れた時には其れが膣内で何か嵩高い様な感じを生じて不快に



下腹部縦断図



子宮口に触れる指

なり、^{ただ}直ちに注意を惹く事になる。

^{ベッサリー}子宮栓を嵌めない内に其^は円頂に^{ほうさんなんこう}硼酸軟膏を注入せよ。そうすれば之が当分の内は子宮口を封ずる役のセメントとなり、^か斯くして二重に避妊の用に供せられる。

^{ベッサリー}子宮栓を嵌めるには其^はれを入れ易い位置と態度を執^とる事が必要である。片方の足を低い椅子の上に挙げると可成^{かなり}膣が拡がる、或は又しやがんで座ろうとする態度を執^とれば子宮が低い位置に来て^{ベッサリー}子宮栓を嵌めるのが容易になる。ゴム膜上にワセリンや油をつけてはならぬ、膜を腐らす恐れがあるから。其面にグリセ



Wishbone Pessary

リンカ石鹼をつけると滑かになつて目的の所に嵌め易くなる。

膣内深く子宮栓を押込んでから、子宮頸部にうまくかぶせる事が出来る。全く嵌つたか否かは自分の指で子宮栓の軟かい部分に触れて試みればわかる。此部分は当然子宮頸部を全く被うべきものであるのだから。膜を通し子宮口に触れて見る事が出来なければ、子宮栓は未だ落着くべき所に落着いて居ない。其時は少し宛後か前へずらして子宮口が全く被われ手触りがする迄動かして見よ。若し其れでも被われて居ない感じがするならば、子宮栓以外の他の避妊法によらねばならぬ。子宮が屈曲するか、又は後へ曲つて居る事が甚だしいと、子宮栓が子宮頸部に達し得ない事もある。

若し子宮栓を適当に按配した時には何等不快の感は無い。そして夫にも別に何かの手段を執つたとも氣付かれる事もない。且又精液は子宮に入る事は出来ないのである。

性交の翌朝迄に洗滌をなす事は必要でない。併し性交直後に洗滌を試みるのは万全の策である。子宮栓を外さない内に約六合（約一リ）計りの洗滌液を用い、其れを外してから又洗滌を続け全く掃除しなければならぬ。

子宮栓は清水で洗い、よく乾かし、箱に片付けると、手入さへよければ一個が二ヶ年間の使用に耐える。

私の考えによれば、子宮栓は避妊法の多い中で最簡便、最正確、最低廉の一法である。先ず医師か看護婦に其用法を習い、それから女達が互に教えればよい。

始終子宮栓を嵌めて居る事は勧めたくはない。使用後直ち

に外し、必要な時丈嵌めればよい。少し許り実行を続けければ其嵌め方が至つて簡単である事が会得出来よう。

所謂Wishbone Pessaryという物があつて最近数多の医師の推奨する所となつた。其れは金と白金とを以て、又は金と銀とを以て製せられて居り、其購求と挿入は必ず医師の手を借らねばならぬ。之は始終嵌めておき、洗滌は無用である。

訳者註 女史の齎した器械類の中には、此図の如く、Y字形の叉になつて居ない、足付蓋形アルミニウム製の子宮栓があつた。専門の産科医ならず共直ちに注意し得る事は、斯様な子宮栓の使用によつて子宮腔内に気泡を輸入し、其れに附随する幾多の危険を生じ得る点である。之が熟練した技術を以て危険無く行つた上で、たとえ子宮孔を密閉し得たとしても、輸卵管から子宮を経て腔に流出せんとする粘液の遮断、密閉は更に他の危険を生じ得る。斯様な状況を考えれば、決して斯様な手段に訴える様な冒険は軽率に試みる事は出来ない。

此子宮栓を二ヶ月又は三ヶ月毎に取外し掃除する方がよい結果が得られる。其れには医師の手を借らねばならぬ。

訳者註

此様な事をいつても月経に処するに如何するか、空論も甚だしと云わざるを得ない。

因みにイギリスの閏秀植物学者Dr. Marie Stopesは最近彼女の著Wise Parenthood. Handbook for Birth Control. London (サンガー女史来朝と同時に当局は此書の輸入販売禁止を試みたと伝えられて居る)に於て避妊法技巧中、此子宮栓使用を専ら推奨して居るが、サンガー女史は斯様に一法に執着する事に賛成しなかつた。

京都に於ける講演で女史が言及した箇条で、正常無病なる夫妻間の性交享樂に際し、コンドーム使用より子宮栓の方が理想的だとし、其理由として最近の学説に拠れば、精液が暫時腔内に貯溜する間に女の体内に吸収されて、衛生上著しい好果を呈するという事であつた。斯様な吸収現象がある事は幾分透析による研究で証せられたにしても、そ

れが著しい好結果があるとは不幸訳者は寡聞にして知らなかつたので、親しく女史に其原著を訳したが、終に明答を得なかつた。訳者は知らない其新研究の声に驚かされて追究したのだが、未だに要領を得ない。何事も疑うべく教育されて来た訳者自身は、女史の此新説を米國一流の法螺と一蹴し去るに忍びないけれ共、兎に角彼女はドイツ語も読めず（某夫人の談には女史がドイツ語雑誌を播くとあつたが、其れは誤解である）又フランス、ドイツ、イギリスの専門雑誌を参照しない事も会談の未確かにわかつたから、此新説を証明無しに吞込む事は暫時見合わせておく。

海綿

海綿も亦菓舗で買う事が出来る。其れは腔から取出す時の便を図り紐が付けてある。数分間性交に先だつて其れを消毒液に浸して置き、それから入る丈奥深く腔内に押込む事とする。或医師の推奨する所に抛れば、海綿の代りに脱脂綿の栓を用いる事にして、事を行う前に三%の石炭酸グリセリン溶液に此綿を浸すのである。精虫は極く弱い石炭酸の溶液で殺される。ヨーロッパの農民の或者は綿に酢を浸したのも同じ目的に用いて充分其効果を挙げて居る。此米國では硼酸溶液を用いて同様の目的に対し成功して居る。無論此際には飽和溶液が必要で、例えば小匙一杯の硼酸をコーヒー茶碗一杯の水に入れ、交せて溶かすのである。

若し之等海綿や綿栓を取出す前に當つて、精虫が子宮に入る事を防ぐ為に消毒液洗滌を行う時には、之等の法は充分に安全確実である。即ち問題というのは、腔進入の途端精虫を殺すか又は進入直後に其れを殺すかにある。海綿或は綿栓を湿すに明礬の弱溶液も用いられる。其他石炭酸を加えたワセリンを綿栓に加えるのもよい。

訳者註 斯く「安全確実」であると安心して居るサンガー女史に対して、訳者は大体次の如き文献に基づいて反対した。Bloch, Iwan (1909) : Das Sexualleben unserer Zeit. 9. Aufl., S. 767. Berlin. 「物理化学的避妊法、之に包括せられるもの内就中著しいのは性交直後の膣洗滌であり、其為には冷水、明礬1%溶液、硫酸銅〇・五乃至1%溶液、硫酸キニーネ四百倍溶液が用いられる。洗滌を行うのは婦人仰臥の位置に於て行い、膣内深く子宮口迄注入しなければならぬ。併し乍ら此法も頗る不確実である。

不確実と評すべき尚他の方法がある。精虫を殺す為に粉末剤を吹き込むとか或は『安全海綿』とかいうものもあるが、殊に後者の如きは Rolletier が『不安全海綿』と冷評したのも蓋し不当でない。尚又種々器械的組合せを以てした方法もあるが、同様不確実である。

斯様な類に属する物は世に無数存在して居る。次に其名称丈を列举すれば、硼酸キニーネ又は枸橼酸を含有する“Sicherheitsovale”『閉膣錠剤』、“Salusovula”, Kamp 氏避妊用綿栓、Hüter 氏“Für the Malitthustian”膣内散布粉末剤、Noffke 氏“Tamponspekulum”, “Spermathanaton”, Weiss 氏避妊装置（浸潤された綿栓と鋼弾条をつけたゴム膜とスベクルムとを組合せたもの）、『ヴィナス器』（大小二個のゴム嚢を連絡させ、小嚢の方には『ヴィナス粉』を充たして膣に挿入し、一方に於て其婦人は射精の刹那の傍にある大嚢を圧迫すれば、其圧は小嚢に伝わり其れにより粉末は膣内に散布せられるという）、『避妊用二重装置子宮栓』（二重の壁で円孔を具え、其一方の中には精子を殺す為に硼酸錠を入れる）等である。

時としては斯様な避妊法の或一つが受精を妨げる事もあるかも知れん。併し大局より見て、斯かる法は、頗る不正確である……」。

斯く碩学の言を引用して訳者はサンガー女史に肉迫した時に、彼女は頗る讚嘆すべき外交的巧妙を以てして何等躊躇なく其説は「流行後れ」Out of fashion であると断定し、且又ヨーロッパに於ける避妊技巧の失敗は要するに米國に比して民衆生活が非科学的である為、徹底的消毒洗滌の行われないのに基づくと何の苦もなく排斥し去った。而して附言して曰く、又今日の避妊技巧は日進月歩の状況にあるから、例えば膣挿入座薬の処方の如きは時々改良される。其故前の処方の失敗を今云々するは迂遠だと云った。

併し乍ら予が引用した Bloch の説は十年以前のものであるにしても、其後学界の趨勢を窺い、例えば Zeitschrift für Sexualwissenschaft の如き専門雑誌を参照する時に於て、大体に於て Bloch の説を修正する必要は無い。訳者は女史の学殖を知らんが為に、其次の会見には近年の名著 Marcuse, Siegel et Bouscatel 等の著書を携えて彼女の判断を乞うたが、其著者の或者の名は知つて居たが、其内容に就いては一向に不案内であり、表題を読む事無くして直ちに出版の年を一瞥し、「1917. oh, that's out of date」と撃退し去る度胸と巧妙な外交に感服する外は無く、唯々何事も「世界第一」を誇り「日進月歩」up to minute と追突欲盛んなる米國氣質に敬意を表する丈に終つた次第である。

第一処方

枸橼酸	一個に対して約	全量に対する比
硼酸	〇・三六グラム	二六分の一
カカオ脂	三・八九グラム	二六分の一〇
一個の重さ	五・四〇グラム	二六分の一五
	九・六五グラム	—

拳固程の大きさの海綿塊をとり十分間煮沸せよ。使用の前に酢と水と等量混合した液に其れを浸し、一部分絞つた上で腔内に挿入し、入れられる丈深く挿込み、子宮口を出来る丈堅く其れで蓋う事とし、其れを取除いた後は充分洗滌せよ。

産児制限に於て最安価な法の一は此大形海綿の使用である。

腔内挿入座薬

米國で座薬の使用は他の避妊法より遙かに一般に実行されてきた。

第二処方

硼酸	一個に対して約	全量に対する比
サリチル酸	〇・六〇グラム	七五分の一〇
重硫酸キニーネ	〇・一二グラム	七五分の二
カカオ脂	三・六〇グラム	七五分の三
一個の重さ	四六・〇グラム	七五分の六〇
		—

其れは何所でも信用の出来る薬舗で求める事が出来る。

其等の大多数のものはカカオ脂或はゼラチンを

以て製せられて居るから、其れを溶かす為に性交に先だつ数分前に腔内に挿入する事が必要である。そして特殊の含有物が精虫の作用を空に帰せしめるのである。薬舗に命じて調製させる処方 は前頁の表の通り数種ある。

之も可成頼むに足りるものである。

次に誰でも容易に製造する事が出来るのは、左の第三処方である。

第三処方		
カカオ脂	一塊に対して約	全量に対する比
硫酸又は塩酸キニーネ	三一・一グラム 三・六グラム	九分の一 九分の一
一個の重さ	三四・七グラム	—

先ずカカオ脂を溶かし、キニーネを混合し、之を平板に固めて後十片に切ればいい。

實際あらゆる腔座薬はすべて避妊剤として作用するが、特に其中で推奨す

べきは次の物である。

Quinsepticon 座薬、一ダースードル、売捌所 Tablax Co., 336 East 166th st., New York.

又大抵の薬舗で買得られる Asepticon 座薬も信頼するに足りるが、前記の物に比すると高価である。The Carbozine Laboratory, 3121 South Broadway, St., Louis, Mo. で発売して居る Carbozine 錠剤は洗滌無用である故を以て、郊外に住む婦人連によって頗る推奨されて居る。価は一ダースードル。

訳者註 我日本に於ける新マルサス主義提唱の元祖として明治三十年代に現れた『人口新論』（小栗某氏著）の中で、一種の腔座薬「貴女の友」の使用が推奨されて居り、之は今も尚性病予防薬として市場にある。恐らくイギリスのマルサス協会のアンニー・ベサント夫人あたりから伝来の処方と想像されるが、其他之と類似の商品と同様に、此所にサ

ンガー女史の記した物に似たものであろう。記者は本邦に於ける実例を引いて、女史が斯様な化学的殺精法に余りに多くの信頼を置き過ぎる事を注意したが、勇敢な彼女の樂觀は記者の忠言によつて毫も動揺しなかつた。併し戦後ドイツで産児制限を行う家族約三百に就いて一々方法と其効果を問うた Marcuse の研究は、化学的殺精法の頼むに足らざるの所以を事実を以て立証して居る。Marcuse (1917) : Die chemische Preventivverkehr.

最近に於てもドイツ輸入の某新薬が花々しい広告を以て市場に現れた。曰く、腔内に於て炭酸瓦斯を含む泡沫塊を形成し、其内に含む Ortho-oxychinolinsulfat の作用と相俟つて微生物全滅、性病予防の効果顕著なりとある。店員の言に拠れば「輸入後大家の実験をも経た權威ある物」の由であるが、其実験者の名、実験及び觀察の方法、結果、既知の例数等に関する答の内にある事実が不十分だから、研究者として予は番頭さんの説明に盲従して無条件に「權威ある物」と断定し得ないのは甚だ遺憾である。

過去に於て斯様な幾多の新処方が見れたが、未だ全然信頼するに足る物は無い。腔座薬万能を謳歌して樂觀するには時機尚早であらう。精虫の生理学上、酸類及び強アルカリ及び純水等に其れが殺される事は疑いない事であるが、腔内の反応が顕微鏡下や試験管内のその様に簡単でない事を思えば、殺精も思う様に行かぬ場合もあり得る事が了解出来るであらう。

之等の難点は文献上の議論で決せられる事でない。唯々冷静正確な觀察による外は無いから、臨床医家諸士が得られた事を記者に報せられん事を此機会に於てお願いする。

屢々問を受ける二、三の質問

第一何が最良の避妊法であるか。

誰にでも、どんな時にも推奨してよい避妊法は一つも無い。良好にして無害な避妊法は数多あるが、其法を行う其人々の賢明なるに従うて其孰れでも安全なものになる。

新婚早々の妻に対しては、初め数ヶ月間は座薬の使用を推奨したい。それから後器官が調うてから子宮栓を嵌めると不快無く其所に落着くであろう。時としては結婚生活の初期には専ら座薬を用い、数児を挙げた後は子宮栓を使用する事をお勧めしたい。

第二、座薬使用の後洗滌は必要であるか。

好結果を確かに求めようとするには、便宜の許す限り早く洗滌した方がいい。

第三、此所で推奨された法のどれかが夫又は妻の健康に対して有害であるか。

医師が夫又は妻、又は両者共に有害だというのは、中絶性交の継続である。此法は一般に推奨されて居ない。併し乍らフランスとイギリスでは大に行われて居る。

訳者註 多少高価な器械、薬品等を買う資力の無い労働者の間に之が行われる事は Marcuse (1917) : Die eheliche Preventiv-verkehr に多くの例で示されて居る。中には応答者自身が「若し之で男が神経衰弱、女がヒステリーに陥る」というのが真ならば、我々労働者は悉く神経衰弱とヒステリーになる筈だのに」と疑いの叫びを発して居る者もある。

第四、どの法が最も安全であるか。

どの法でも注意を払い頭を働かして行うならば、皆安全である。

訳者註 少なく共今の日本の生活状態を眼前に控えては、到底斯く元気に請合う事は出来ない事は大いに遺憾である。

第五、最も面倒の少ないのはどの法であるか。

子宮栓を嵌めておけば翌日迄子宮頸を蓋うたままにしておかれるから、最も面倒の少ないものである。

第六、妊娠せぬ事請合の時期があるか。

前後の月経の中間に性交しても妊娠せぬ事請合うけあいという絶対的安全期は決してない。少なく共どの女に對してでもあるとは云えない。或婦人達は自分達で斯かよう様な安全期があると主張するけれど、實際あなたが其事をキツパリ知るのでなければ、私は誰にも其様な事をあてにせぬ様に注意しておきたい。

第七、月経終了後何日頃から性交を行うべきものか。

之は人様々で其婦人の天性の求むるままに任すべきものである。

訳者註 夫と別居する妻が周期的に性交欲を生ずる事を多く觀察記録して、其結果から割わりだ出した婦人側の最新の一提案がある。

即ち月経開始後十二、十三日目に第一回の性交欲昂進が起り、二日程続いて止む。中十日程の休みを挟んで又二十四日目頃に第二回の性交欲昂進が起り、又二日程続いて止むのが多い。人により又同人でも栄養状態如何いかにんにより一期内に一回しか昂進の起らぬ事もある。所で婦人側からの注文では、此昂進期の中では一回以上数回を繰返し、それから後の十日間は全然性交を止めるがよからう(女から見て)というのであるが、無論、衣食住其他風俗習慣の違ふ日本に此説の直輸入は出来ないが、性交欲昂進の周期性の存否如何そんびいかにんに就ついて医家の直接觀察研究を希望する。文献 Stopes, Dr. Marie (1920) : Married Love. A book for Married Couples. 6th Ed., London.

第八、子に乳を飲ますと妊娠を防ぐ事が出来るか。

子に乳を与えて居る間、殊ことに産後三、四ヶ月以内には仲々妊娠が起らぬものだと世間では云うて居る。併しかし産後直ちに受胎して十一ヶ月以後に第二児を挙げる婦人が實際居るのだから、前の様な説をあてにせぬ様に念を押ししたい。産後間も無く何かの避妊法を行みて、唯ただ機會の赴おもむくがままに放棄するのでなく、其次の児の来るべき時をよく考えて調節するがいい。

第九、妊娠を恐れる事が子供に影響を及ぼすか。

恐怖は何にでも影響する、けれ共妊娠の恐怖が惹起して人類に与えた影響は未だ知らない。

第十、月経が停止した当初二、三週間の内に薬を服用するのは有害であるか。

用いられた薬品が期待した効果を挙げない場合には、特に母のみでなく子に対してても有害だと考えられて居る。其薬品が受精卵を子宮外に駆逐する程の強烈な時には、他の器官にも影響する道理である。子が可成生長しても尚寝小便を継続するとか或は他の器官が虚弱である様な場合に、元を訊せば母親が滅多矢鱈に「めぐりをつけよう」とした事を見出す事が屢々である。

第十一、用心は男がすべきものか、女がすべきものか。

用心に如くはなし、孰れか一方がするか兩人共でもいい。併し妻が用心するのが最もいい。夫の行う法は中絶性交か又はコンドームにしても銘々多くの人々が反対する点を有して居る。二法の孰れに拠るにしても妻の側で洗滌の勞が幾分助かるといふ事は事実であるが、併し一方に於て犯すべからざる大なる親しみとか、或は夫妻遺憾無く相引く磁気となつて働く精神的統一とかをば妻は失う事になる。一体中絶性交やコンドームの使用の時の如く恐怖によつて妨害を蒙る時には、斯様な喜びが生じ得ないのである。或敏感な男達は多くの女達と同様に之等の両法を用うるに反対するが、其種の事は各自銘々の好悪に依じて決すべき問題であり、多数の男は妻の洗滌の勞を減ずる為にコンドーム使用の方を選ぶのである。

第十二、女という者は性交に快楽を発見し得べき者か。然り。

第十三、何故に或女は其れに快感を覺えないのか。

快感を生じない理由は、性交の結果たる妊娠を恐怖する念が彼女の心にみちみちて居るか、それ共夫の方の無知と無器用によるのである。

訳者註 此事に関して前掲の註(二一頁)参照。

第十四、斯様な困難は解決が出来るか。

然り、第一の場合では避妊法の或一を行えば自信が出来て、妊娠の恐怖から解放されて満足な享樂を得られる。第二の場合では、妻が自然に交わりを欲する時ばかりに事を行えば、夫婦の關係にヨリ多くの愛と悦びが生ずる。此事を夫に篤と会得させれば問題は解決する。

此所迄書いた中で私は最もよく知られた避妊法を述べた。少なくとも一人児を持つ無産者の婦人に対し私は個人として、よく嵌る子宮栓を用い其れをよく按配する事をおすすめる。

家族制限即ち産児調節は欧米諸国有数の医師によつて推奨されて居る。最早唯「猥褻」という様な間違つた語で以て此運動を撃退すべき時でない。あらゆる文明国に於て最も有力なる階級の家庭数百万の中に於て、産児調節は個人道德の一戒に加えられたのである。之がやがて公共道德によつて充分に是認せられて用いられるのも遠い将来の事でない。

訳者註 一 経済学者と一 衛生学者の意見を掲げて見る。

「之迄斯様な処置は不道德であり罰すべきものと思ひ、又神の摂理の侵害として罰したのである。併し斯様な判断は極端であり、人間の計画と先見に基づく行動は、他に於けると同様此問題も是認されねばならぬ」Gustav Schmoller.

「大規模出産と大規模殺人とを併行して行うような、不合理な天然状態の悲惨から人類を解放したいと思ふならば、産児制限を行わねばならぬ」Gruber (1915): Hygiene des Geschlechtslebens, S. 60-62, Stuttgart.

ブライト病・心臟病・精神病・鬱憂症・白痴・結核、及び黴毒の様な甚だしい病苦に悩む女性に対して、

医師たる者は出来得る場合に其女の妊娠の埒を明けてやる事を許されて居ない。唯一時凌ぎに切抜ける丈の事で、よし其女の一命が其病の為に危急に迫る様な場合に立到つても、他の同職一名以上の立会同意を得なければ、其女を救う事は出来ない。其故に斯様な病に悩む母と其児の死亡率は頗る高く、又早産は甚だ普通である。

之等の母達の命を助け、死産を防ぎ、欠陥ある児の出生をなくする事は、此産児制限に対する健全且正当な教育運動の是非共必要である事を力説せしめる理由である。

参考用小冊子

『娘の知るべき事』マーガレット・サンガー著、紙綴三十セント、クローズ綴五十五セント、“What Every Girl Should Know”.

『母の知るべき事』同右著、仮綴三十セント、クローズ綴五十五セント、“What Every Mother Should Know”.

『結婚の目的』ハヴェロック・エリス著、産児制限必要論。三十セント、“The Objects of Marriage”.
『産児制限評論』発行者、マーガレット・サンガー。一ケ年分二ドル、“The Birth Control Review”.

申込所 The American Birth Control League. Margaret Sanger, President. 104, Fifth Avenue, New York City, U. S. A.

概括批判

米国式樂觀の直輸入は不可能

訳文が我流である為に原文の繊巧な調子を伝えるに失敗したけれ共、兎に角女史の書いたものには女性
 の思慮深いやさしさと、しかも信念に即して毅然たる態度とが巧みに調和されて居る事を発見する。併し
 既に訳者註として夫々の個所に批判を試みて置いた通り、女史の所説には全体として米国式の軽便な樂觀
 が充滿して居り、産児制限を要望して即時調整の可能を軽く信じ過ぎて居る様に見える。無論米国式家庭
 内の近代科学応用は羨むべきものであり、浴槽・洗面所・便器を一ヶ所に纏めた化粧室を控え、更に又寢
 室は充分に外界から遮断されて居て、寢台下又は寢台の脇の棚に蔵められた便器もあり、斯様な完全した
 設備に加えて豊富な財力と急進的な婦人の頭脳とが女史の云う所の幾分を実現する事は事実であろう。吾
 人は常に米国式齒科器械の仰々しさに感ずる如く、器械力の応用と分化が素晴らしい割に、其費用に比し
 て案外能率が揚がらぬに失望する事があり、過日女史の齎し來つた避妊具諸種の陳列を見るに於て同様の
 感を起さざるを得なかつた。日常生活の科学化の徹底振りには敬服しても、果して其等の物がピカピカし
 て居る程に実行を挙げ得るか如何を訊したが、女史の云う所が兎角其市場に現れて売行く事を云う丈で、
 實際其等の物の顧客が如何なる結果を有して居るかに就いて語り得る資料を有しなかつた。此所に於て研
 究者たる予は Marcuse の行つた様に各個の例に就いて方法と其結果を訊して見た上でなければ、到底女
 史の如く樂觀する事は出来ないと言つて賛成を保留したのであつた。

楽観は早計更に一層の追究が必要

人夫々それぞれの先天後天の形質機能の差が区々まちまちであるから、千篇一律の解決法が存在しない事は女史も云う通りであるが、其れにしても斯様かように多種多様な避妊法及び器械、薬剤がある事は、取りも直さず人々の要求が切迫して居る事を教うると共に、既存の各法各員が比較的無効なるが為に不絶たえず新発見を求めて居る事を示すのに外ならぬ。

現に楽観組の本場たる米国を見よ、

「通常密通に伴う諸状況の下に於て、自然の道行きというものは仲々もぐる事は出来ないという恐れが始終存在して居る。此事をどうにかして青年男女に吹き込んで置くべきものだ。所が何故なだゆえそうであるかを公開の席で話す事は医師の集合に於ける外、法律によつて禁じられて居る。併し乍なから信用すべき医師の言に拠れば、密通から起る種々の悲劇は大抵坊間中（市）に行われる避妊法に誤った信用を与えた事に始まつて居る。だから斯様かような真相を広く青年男女に知らせる事が出来たならば、多くの私通をば防止する事が出来るであらう」Bigelow, M. A. (1916): Sex Education. p. 57. New York.

サンガー女史は如何いかに楽観して居ても現に此通り足元から鳥が立つて居る。我国に於ても粗悪なるコンドームや内容不明なる膺座薬ちゆうざやくに過度の信頼をして失望した多くの実例を指摘する事が出来る。予は之等に關して実例を蒐集したい希望を有して居るから、読者たる諸国手（医師の敬称）の診察治療された諸例に於て何等なんらか避妊法実行の例を発見されたならば、其報告を寄せられん事を御願いする。

本邦に於ける実行の可能性

扱て之等諸法の奏効適確の如何は暫くおいて論ぜず、実行可能如何の問題に入れば、有産階級に有識婦人が殖えた今日、芸術至上主義の文化生活が紙上に提唱せられ図上に種々設計されて居る今日でもどうであらうか。公開の席上に自らの子宮病を云々してしかも恥じない貴婦人は恐らく自己の子宮が何所にあるかを知るまい。之等の基礎智識と科学的態度無くして徒らに洋館に住み、ピアノを弾じ、水雪隠（水洗便所）を使用するも、到底米国の婦人労働者の自覚にも到達し得ない事は憂うべき事か悦ぶべき事か、判断に苦しむ次第である。

有産婦人にして有識有自覚なるは少なく、有識有自覚なる婦人の多くは無産に苦しむ現状に面して、比較的実行可能にして享樂を殺ぐ事少なく、又人道的觀念を傷つける事少ないのは化学的殺精法の中、膾座薬の使用であらうが、之は前述の如く最近ドイツの実状報告に徴しても奏効頗る不正確な事を否定出来ない。又精虫の機械的遮断にしても大規模に産出される大阪製コンドームを見よ、或は遊戯的氣分の充ち充ちたる装飾と色彩とカラクリを具えて居るものもあり、形状丈は調うて居ても使用に耐えぬが多くて、大正（大正時代一九二一—一九二五）日本文化の或方面の象徴となつて居る。何にせよ要は物の問題即ち器械や方法の問題が結局頭の問題に帰着する訳である。

実験と實際との隔たり

精虫生理の研究者として当面の問題は精虫行動の追究にある。顕微鏡下や試験管や魔法瓶の中で精虫が如何なる行動をなすか、其れは略ぼ決定されたとしても実際上は量不定にして酸度、アルカリ度不定、且又含有物多種にして其相互間の比例も一定せぬ媒体の中に浮遊して居る微生物の行動は、容易に端倪

(始めと)を許さぬものがある事は云う迄も無い。

避妊の是非

此所迄は避妊法実行の是非利害も論ずる事なく、唯ありのままの方法の比較及び実行の可能性を考えたのである。一体我々の性的活動に於て男子性交時一回の射精量中にある平均二億の精子を採り、例えば人工受精の法により稀釈して其各々に有効なる生存を続けさせたとすれば、唯一回の性交に費す精液を以て全世界の生殖可能なる婦人悉皆(この)をして妊娠せしむるに充分である。月経前後に排出される卵子を毎回一個として、月経初潮より閉鎖に到る迄先ず三十年間休みなく月経ありとすれば、受精可能なる卵は婦人一人の一生に於て約五百個造られて徒らに排出退化に終る。如何に仏者が殺生戒を力説し又之に従わんと欲しても、之等生殖物質の中に存する微生物悉くを救うて生長せしめる事は不可能である。たとい其企てが可能としても之等無数の生物を生長せしめる事は生物として其種の自滅を招く事になる。粗製濫造によつて社会的・民族的・家族的墮落且自滅に至る事がいやならば、是非或好適なる条件の下に或良好なる精子を出来得るならば選択し、以て理性と思慮先見ある万物の霊長として種族保存即ち永生を望む本能を充足させる事が吾人の理想である。性交と云う天魁羅の餌に釣られて生殖の落とし穴にいやいや乍らばかり込むものと見るは、享樂を追う動物たる人間をのみ見て、更に進んで父たり母たらんとする高貴なる人間性を無視するものでないか。即ち我々は誰彼の漏れ無く有意無意に生殖細胞の選択淘汰を行うて居り、又行わねばならぬ次第である。此際二児制、三児制を云々するは唯程度の差たるに過ぎない。

無情なる自然に対する科学の立場

斯く見来れば誰しも必要上精子、卵子の淘汰を行うて居る。唯墮胎、殺児の如く多細胞生物に生長した個体を殺さぬ丈の事である。淘汰にしても例えば吉岡弥生子女史の如き極端右傾派に従えば、多くを生き之を苛酷極まれる境遇に淘汰させて適者を求めんとする如き、唯淘汰を宿命的因子に委任し淘汰の時を少しずらした丈に過ぎない。若し人類が理性も具えず唯本能の唆るが儘に盲動し、生存競争による容赦無い自然淘汰に暴露される外に道が無いとすれば、吉岡女史の云う如くなるより外はあるまい。併し我々の智性は幾分天然力の真相を弁え、之等宮力の諸種を我等の為に適宜按配利用する事を得せしめた我々の科学は、天然力を征服したとはいえぬが、少なく共之に盲従する必要をなくした。而して我等の向上心に富んだ理性は動物性の名残りたる善悪諸種の本能を適宜に按配し、操縦統御をなさんと企てて多少の成功を遂げて居る。斯様な対策の自由選択という人類の特権を放棄するならば、現代の科学殊に病原微生物の征服に努力する近世医学の如きは全然無意味に帰してしまふ筈。犬や猿が妊娠の時を選擇自由を有しないからとて、万物の霊長が犬や猿と同じ似而非宿命に盲従すべき必要が無いのである。

(一)〔編註〕 東京女子医大の前身・東京女医学校創立者。アジア太平洋戦争中、「婦人国策委員第一号」他、愛国婦人会評議員、大日本連合女子青年団長、大日本青年団顧問、大日本婦人会顧問など要職につき、多数の青年・婦人の戦争協力を指導した。

宿命に淘汰を委めるは血と肉と涙の濫費

所詮行わねばならぬ淘汰は吉岡式に生後にやるとすれば、母体のエネルギーを充分に消費し且又其児自体の生命エネルギーを費した後、しかも社会存立の意義から云うて無益な(少なく共有害でないにして

も)生を送る人間を過剰に産しなければならぬ次第であり、人類社会の大局から見ても一家の内情から云うても生命エネルギーの濫費たる事を免れない。人間の科学は浅薄なりと雖も斯く血と肉と汗と涙とを濫費して迄も暗中模索を試みねばならぬ程無力なものであるか。否かけがえへの無い生命物質を取返しの付かぬ使途の為にムザムザと捨てる事をば吾人の理性が許さないのである。

傷つけては取返しの付かぬ感情の問題

次に我々の社会生活の基礎として尊重せねばならぬ感情上の問題がある。よし抽象的概括的に生後の自由淘汰を認めるにしても、現に我等の愛する姉妹又は妻が生んでは殺し殺しするのを見、或は虚弱な子を控え日夜苦心して神経を尖らして居るのを進化に於ける必然の現象と澄まして見て居られるか。此点に於て子を持たぬ人、姉妹を有せぬ者は一人前の人間として此問題に容喙する資格が無い。

如何にも科学は抽象客観化と情に脆くない事を要求して居る。併し乍ら人間の築いた科学である医学は、幾多の生霊が無益に其血肉を無知という悪魔の前に供物として居るのを黙視していいと云うのか。いいと云うならば、それは人が虐げられるのを見て悦ぶ変態性慾や嫉妬の如きもので、我々正常の人間が携わるべき事柄でない。斯様な非人間的、否食人的科学は即刻此人間の世界より駆逐すべきものである。

当然な弱肉強食と無用な残虐

弱肉強食は自然進化に於ける鉄則であり、吾人が論理上実行不可能な極端な利他行為に終始して餓死を求めない限りは、何等かの形式に於て現に弱肉強食を実行せざるを得ない。例えば人の餌食となる運命の

下に置かれた牛、豚、魚、鳥・生体解剖に用いられた試験動物・駆虫剤の下に暴露された内臓寄生虫及び病原微生物等を見よ。彼等より見れば残虐にして飽く事の無いのは人類であろうが、吾人人類は之等の生物の殺生を断念して我等自身の生を放棄しようとも思わないのである。併し乍ら此当然なる弱肉強食の過程に於ても吾人の貴い感情を無視してはならぬ。即ち生体解剖に際して無用の苦痛を避ける為に麻醉剤を使用する事や市井雑踏の地に近く屠場を置かぬ事等は、彼等動物の苦痛を軽減させる為よりも寧ろ我等人類の感情を無益に荒ましめぬ様、又無用の不快を抱き或は終に其不快に麻痺させられる事のない様にと我等自身の慾求に基づいて居る。殺菌消毒は是非も無い。牛、豚を屠る事も当然だ。併し乍ら殺戮に馴れる事も当然の度を越えて、吾人同胞が互に相屠るのを見ても平然として居る様な変態心理の發生を恐れざるを得ない。換言すれば、或は小形の生物に対する必要の行為から始め、終に他の形似通った大形の生物（極度に進めば同類たる人間に迄も）に対する無用な行為に至る迄、類推的又拡張的に是認したくなる心理的性情を吾人は本能的に恐れて居るのである。で斯様な深い理由、大なる影響があるのだから、肉食をやめて鶏卵にのみ依頼する菜食主義者、平生の獣肉はよして魚肉のみを用いて精進齋を行うカトリック教徒、殺生戒の適用は有脊椎動物にのみ限る或仏教者等を見て、無造作に頭が悪いなあと罵倒し去るは実に心無いわざ、又評する本人の頭の粗雑さ加減を暴露する様な事である。斯く見れば之等諸種の精進齋を行行い又功德を施す事は孰れも、人心の微妙な根底から萌して来る同一衝動に基づき唯考うる人の生物学的智識の程度と、其人の趣味の好悪と其人の感受性の鋭鈍に従うて異なる発表形式をとつたものに外ならぬ。

感情の鈍銳の差

之を要するに吾人にとつて殺生は自己保存上止むを得ない、精々目立たぬ犠牲を費す丈に留めておきたいというのが吾人の感情上の要求である。所が人の感情にしても時代によつて感受性の変遷があり、同時代にしても教育や性向の異なるに従ひ粗末な荒削りのから洗練されたデリケートなものに至る迄種々の段階が存して居る。即ち人類社会に於ける不適者淘汰の手段に関しても、例えば過度の刺戟に神経が麻痺したか、それ共初めから出来の悪い感じを持合わせて居る連中には、へり放し、飼ひ放し、餓死仕放題、死産、早世お構ひ無しの現状に対して平氣の平左で居られる。それで又誰かの如く弱肉強食、適者生存という進化の大理法だと澄まし込んで居られるのは頗る幸福である。併しそうは安心して居られぬ人達は現に娑婆に出て見す見す苦勞をさせるのも可哀相だと、胎児を暗から暗へと葬ろうとする。無論「痴情の結果」たる殺児、墮胎には賤しむべき責任回避があり、又一方に於て妊娠、産褥、授乳という婦人固有の性的危機に於ける動揺が加わるにしても、尚一方に於て親の慈悲が其行為の中に発見されぬ事もない。

胎児即ち一寄生虫

今生物学上から人体寄生動物の二、三を見るに、微より始めて病原微生物から、さなだ虫、蛔虫、住血吸虫の如き内臓寄生虫、それから蚤、虱、蚊の如き外部寄生虫等種々あるが、孰れも宿主たる人間の生命エネルギーを掠奪して其生を営み種族保存の事を行つて居る。此見地に立つて妊娠という現象を見れば、胎児は宿主たる母の子宮の中で胎盤という一時的吸盤を形成し、之を通して間接に宿主の体内から養分を吸収略取する寄生動物に相違無い。内臓寄生虫の繁殖に際しても必ずしも生命健康に著しい障害を起すとは限らない様に、妊娠になつたからいつも母体の生命健康に支障が生じるとも限らない。併し乍ら母が結

核症に悩みしかも胎児は依然発達を続ける様な場合は、寄生動物の方が宿主よりも多くの生命エネルギーを消費する危急存亡の折に匹敵し、断乎たる応急の処置を要する事は云う迄も無い。之等の対応処置にしても其他の生物学的状況に就いて見ても、胎児は明白に母という宿主に対する寄生動物である。唯異なる点は母と胎児との間に細胞遺伝質の連絡があるという事だけである。

合理的で徹底した駆虫手段

寄生虫が宿主の栄養分を奪取する事甚だしい時は駆虫剤を服用して体外に駆逐せんと試みる。子宮内寄生動物たる胎児に対しても宿主たる母が其寄生を欲しない時は、時として通経剤の如き一種駆虫剤を服用する事がある。更に寄生虫の跋扈甚だしくして宿主に致命的損害を与えんとする場合には、乾坤一擲外科的手術に訴えても最後の解決を試みねばならぬ。併し乍ら胎児の場合には寄生虫駆除の如く冷静事に当る事は六ヶしい。医術上の応急処置たる病母又は病胎児に關して行う人工早産に際しても、一度四肢を具え始めた胎児を取出すのは妊婦にとり又其胎児の父にとつても決して心持のいい事ではない。

即ち直接間接に化学的刺戟を与えて子宮より胎児を駆逐し或は直接胎児を摘出するにしても、其方法は生後の自由淘汰に任すより稍進んだもの様であるが、矢張原始的処置であり、寄生動物を体内に輸入定住せしめた後駆除を図る如きは、内臓寄生虫に対しても胎児に対してもおくればせの方法にすぎず又危険も多い。要は更に積極的に其予防の歩を進め寄生動物の卵又は幼虫を全然体内に輸入せぬに越した事はない。

斯く考え来り、而して又前に述べた吾人の感情其ものを参酌する時は、次代の生物たるべき適者の淘汰

は生後よりも胎児に於て、胎児に於けるよりも更に若き精子卵子に於て行ふべきものである事は、論理的必然の結論である。且又産児制限上の技巧の歴史的進化を辿る時に、其順次的推移は歴然と認め得べきものがあり、其変化は一般民衆の生物学的見解の向上と美的感情の洗練と趣味の合理化に帰すべきものであらう。ふえよ、うめよ、地にみてよ（『旧約聖書』創世記九・一）と絶叫し乍ら、社会に於ても悪貨が良貨を駆逐するのグレシャム法則が行われ、不適者が多く子を産み適者が多く産まざるの現状を見ざる所謂識者共は、時代錯誤の *Laissez faire* 「成行きのまま」主義に執着して居るばかり、優者をして多く産ましめ劣者痴者の生殖能力を殺がんとする優生学施設をも考うる事なく、又各自の社会連帯の責任觀念に基づく産児制限をも顧みる事のないのは頗る怪しむべき現象でもある。

「自然盲濁」とは何事であるか

無論之迄論じ来つた避妊とは、優生学上の絶対的不妊・永久的生殖能力剥奪を目的とする去勢・卵巣摘出・輸精管又は輸卵管切断とは全然異なり、条件附避妊即ち妊娠期の自由選択を可能ならしめる為に殺卵又は殺精及び機械的遮断を行う事を意味して居る。然るに一部医学者間に於て斯様な一時的殺精又は殺卵を「天理に悖るもの」又は「自然盲濁」の処置と見做す人があるが、果して斯様に解釈すべきものであるか。予は前に胎児を寄生動物と見做したのであるが、母体が妊娠に堪え得ざる時に侵入し来る精子は内臓寄生虫の卵や幼虫と何等異なる点がない。若し体内に定着生長すれば母体に危害を与うるに相違ないのだから、侵入を未然に遮断するのが最上の策である。侵入定住の後処置を講ずるは迂遠にして且危険なる下策であり、人間の血肉の濫費も起る訳だ。斯く賢明にして先見の明ある処置が「自然盲濁」であるとすれ

ば、流行性感冒予防の為に含嗽(うが)を試みる事も、マラリヤ病原体全滅の為にキニーネを服用する事も、トレポネーマ・パリダ(梅毒)駆逐の為にサルバルサンを静脈内に注射する事も、諸種の予防血清を注射して免疫を講じる事も皆「造化を冒し天理に悖る」処置ならざるはあるまい。斯様な自然冒瀆を試みるのは恐懼に堪えぬというならば、宜しく医学研究を放棄し近世の予防医学撲滅運動に熱中せられるがよい。斯様な論は古くはジェンナーやパスツールの頃から最近のエルリッヒ・秦に至る迄繰返された事だ。今更事新しく青筋を立てる必要もあるまい。

「自然現象の影響結果を吾人が変更させる事は可能だ。併し乍ら現象其自身は吾人の力では何ともかえる訳に行かぬ。其際我々人類に与えられて居る権利と云うのは、局外の観察者として差当り自分の氣に入つた見地を選び其所から高見の見物をする事である。

併し乍ら人類の行為に関しては全く別問題だ。我々人類が自己を個性を有する者と尊重し、且又自己の決心によつて選んだ目標に向つて進む其権利を放棄せぬ限り、我々は自己個性の見地の上に立つてあらゆる人類の行為に一つの纏まつた判決を下さねばならぬ。然るに……(争)は人類の一行為である。而して一行為として是か非か断乎たる判決を待つて居る。此所に於てすべての妥協は不徹底である、否殆ど不道德なのである」 Nicolai, G. (1919) : Die Biologie des Krieges. 2. Aufl. S. 5, Zürich.

狭義の産児制限は必要

広義に於ける産児制限とは胎児の人工的除去即ち人工早産をも含んでも居るが、斯様な晩期の処置は吾

人の理性及び感情より見るも妊婦の健康に於て考へても好ましくない。だから之を除いた狭義の産児制限とは即ち妊娠予防・調節こそ吾人人類の科学的文化に於て不可欠のものであると、予は如上の論証に基づいて此所に結論する。

避妊技巧の利害拙劣なるもの改良

扱て原則に於て妊娠調節は是なりと認めたから、其為に用ゆる技巧に有害なものはないかと一々吟味してかからねばならぬが、技巧一々の批判は既に前に小冊子の訳者註に於て述べたから再び此所で反復しない。唯約言して注意して置きたい事は、彼の疑問的な中絶性交の外の法、例えばコンドーム又はペッサリーの使用や洗滌や腔座薬挿入等に関連し、何か積極的に害を生じたという実証はまだ報告されて居ない事を追加して置く。

所で実行に於て諸種の問題を惹き起すのは皆技巧の未熟又は器械の不完全に基づく過失であり、専門家の適当な指導と当事者の充分徹底した理解とを以てすれば未然に避け得られる性質のものである。例えば粗悪なコンドーム使用の後其膜の破片が腔内に残留し腔内腔に炎症を生じたという事実の如きは、医家が信頼するに足るコンドームを推奨し其使用に関する適切な注意を与えねばならぬ責任ある事を教ゆるもので、徒らに其危険をのみ誇張して恐怖を生ぜしめるのは当を得て居ない。且又粗製品の横行を看過するは例えば眼科医が眼鏡の改良に対する時の如く、専門家として怠慢の責浅からざるものがある。

独断説から来る虚喝

避妊技巧に関連した非難の中に既成道徳の独断説から割出した無根の虚説がある。事実上疑いも無い事が立証されても左様な事を一般民衆に知らせると宜しくないというので無理矢理事実は秘し隠しておいて、在来の因襲と余り背かない方の憶説の方をさも尤もらしく受売りするという事が特に此性智識の境に於て多く発見される。純潔健全な青年に当然な夢精を病的なりと断定し、青春期に最も普通のな且生理的現象と見做すべき自慰をば科学的証拠無くして大害ありと強い、罪無き青年を強迫観念を以て悩まし神経衰弱を惹起せしむるの類、皆之である。

山本宣治著、論文集『自由、性教育』近刊（参照）

コンドーム性交によりて起る危険も多々伝えられて居るが、之等は既成道徳の見地より威嚇し以て其れを防がんとする策ではないか。殊に心理的刺戟との強迫固定観念の作用に左右される事の多い性的現象に於て、よし或二現象が同時に或は前後して起つたとしても、其兩者間に因果關係を認める事は早速に出来かねる。要するに或独断説に執着し成心を以て弊害ありと仮定し、之を強迫観念として無邪気なる民衆を威嚇するのは科学者のとるべき態度でない。

避妊は是であり、其技巧で既知のもの多くは有効ときっぱり断言出来ないが、無害であると述べて、此本論を終る。但し此機会を利用して、此避妊技巧を専門家以外の者に全然隠蔽する事によつて起る弊害と、又将来官憲の理解を得た後斯様な智識を普及する事は社会として国家として望ましい、否是非共必要であるという積極的理由を附記したい。

避妊法に対する男子の智識慾

先に公表した純科学的性教育に拠る性的啓蒙運動の実現の為、且又性現象に就いて本邦独特の材料を集める予備行為として一般民衆の理解と援助とを求める為、予は昨年来各所に性教育講演を試みた。其関係上学生（高等学校程度）・小学校教師・農村及び都市の青年団員と其指導者たる老年、壯年者等に接触して、種々の質問を受けたが、其問の多くが産児制限又は妊娠予防に触れる点に於て、予は多少予想外の感があつた次第である。

避妊法質問者の分類

西洋の事は論ぜず、予は唯関西の一地方に於て接触した一団の人々に就いて、避妊法の智識を要求する男子の分類を年齢、要求する理由等に從うて試みて見る。対婦人の調査は予の講演が単刀直入である為に多分忌避されたであろうし、又婦人自身が斯様な智識の必要をよし自覺して居ても、未だ公けに質問する迄の度胸が出来ないのであるから何も調べて居ない。

扨て第一に未婚の青年特に学生は此種の智識を求めては居るけれ共、公けに其智識慾を質問に拠つて表わさず、唯坊間に行わるる所謂性研究の書を密かに漁つて之に不安乍らも幾分の信用を置かんと試みて居る一群である。

第二には既婚者の一団であり、之を智識の必要の来る理由と其強さの程度で、甲（直接致命的必要を有する者）、乙（間接致命的必要を有する者、換言すれば経済的圧迫の為此智識を求むる事の余儀無き者）、丙（享樂上自由活動を求むる為に智識を求むる者）の三類に分ける。無論斯様な便宜上の分類上では時と場合により、同一人でも数類に股を掛ける事もあるのは云う迄も無い。

避妊法を知らねばならぬ人

扱^さて第二種甲類の、産児制限法に對して直接致命的必要を有する者とは、例^{たと}えば妊娠に堪^たえ得^えざる妻又は確^たかに病^び兒、畸^き形^{けい}兒を揚^あぐるに相^あ違^ち無^き妻を控^こえたる夫であり、其^か數^なは可^か成^{なり}多^い。妻は妊娠に堪^たえない^いけれ共^{ども}なお同^{どう}接^{けつ}に幸^{さい}福^{ふく}なる人生を樂^{たの}しみ得^える程度^{ていど}の健康を有する場合に、医^い師^したる者は反^{はん}復^{ふく}人工^{じんこう}早^{そう}産^{さん}を行^いうが如^{ごと}き拙^ち劣^り、野^や蠻^ま極^{ごく}ま^るる処^{しょ}置^ちを行^いう前^{まへ}に此^こ種^{しゆ}の智^ち識^{しき}を授^おくるは当^{あた}然^{ぜん}である。如^い何^かに保^ほ守^{しゆ}的^{てき}なる論^{ろん}者^{しや}と雖^{いえど}も、此^こ公^{こう}正^{せい}なる合^が理^り的^{てき}且^{かつ}人^{じん}道^{どう}的^{てき}の処^{しょ}置^ちを非^ひ難^{なん}し得^えないであらう。

避妊法を学ぶ必要があると自信して居る人

次に乙類に属する、間^{かん}接^{けつ}致^ち命^{めい}的^{てき}の要^{よう}求^{きゅう}を有^あする一^{いつ}団^{だん}とは、既^{すで}に數^{かず}兒^にを揚^あげたるも或^{ある}は未^{まだ}だ一^{いつ}兒^にを儲^もけな^いにしても、到^{いた}底^{てい}当^{たう}分^{ぶん}兒^にを育^そ得^える經^{けい}濟^じ的^{てき}の实^{じつ}力^{りき}並^{なら}びに潜^{せん}勢^{せい}力^{りき}を有^あせずと信^{しん}じて、居^ゐる者^{しや}である。育^そ兒^にの為^{ため}に余^{あま}力^{りき}なしと主^{しゆ}觀^{くわん}的^{てき}に信^{しん}じて居^ゐるのであるが、尚^{なほ}第^{だい}三^{さん}者^{しや}から見^みて其^{その}窮^{きゆう}迫^{ぱく}は当^{たう}人^{じん}の信^{しん}じて居^ゐる如^{ごと}く決^{けつ}定的^{てい}であるか、それ共^{ども}更に兒^にを儲^もけた暁^{あけ}尚^{なほ}奮^{ふん}勵^{れき}努力^{どふりき}其^{その}窮^{きゆう}境^{けい}を突^つ破^ぱし得^える程度^{ていど}の相^あ對^{たい}性^{せい}を具^そなへて居^ゐるか、一^{いつ}種^{しゆ}意^い見^{けん}上^{じやう}解^{かい}の問^{もん}題^{だい}であるから、然^{しか}るや否^{いな}やは見^みる人^{ひと}の見^{けん}地^ち次^じ第^{だい}で判^{はん}断^{だん}が違^{ちが}う。併^{しか}し乍^なら予^よの僅^{わずか}かなる經^{けい}驗^{げん}の範^{はん}圍^い内^{ない}でも小^{せう}学^{がく}教^{きやう}員^{いん}中^{ちゆう}特^{とく}に校^{がう}長^{ちやう}級^{きゆう}の人^{ひと}々^々の多^{おほ}くが斯^か様^{よう}な見^{けん}解^{かい}を抱^{かか}いて居^ゐたのには驚^{おどろ}かざるを得^えなかつた。之^{これ}等^らの信^{しん}念^{ねん}を抱^{かか}しむるに至^{いた}つたのは經^{けい}濟^じ的^{てき}の及^{およ}び政^{せい}治^ち的^{てき}の原^{げん}因^{いん}に基^きづくものであり、吾^{われ}人^{ひと}の如^{ごと}き純^{じゆん}正^{せい}生^{せい}物^{ぶつ}学^{がく}の研^{けん}究^{きゆう}者^{しや}の直^{ちき}接^{けつ}關^{かん}係^{けい}して左^さ右^うし得^えらるる性^{せい}質^{しつ}のものでない^いと予^よは解^{かい}釈^{しやく}するるのであるから、唯^{ただ}此^こ事^じ実^{じつ}を述^{しゆ}べて当^{たう}該^{がい}關^{かん}係^{けい}者^{しや}の参^{さん}考^{こう}資^し料^{りょう}にし^したいと思^{おも}う丈^{だけ}である。

所^こが此^こ「育^そ兒^にの余^{あま}裕^よ」無^なしとい^いう信^{しん}念^{ねん}を密^{ひそ}かに心^{こころ}中^{ちゆう}に抱^{かか}き又^{また}はこわごわ乍^なら公^{こう}言^{げん}する不^ふ逞^{てい}の輩^{やから}に對^{たい}して、

一方政府当局及び一部の学者識者は、或は尽忠報国の愛国心に訴え、或は民族膨脹の雄図を説き、或は富国強兵の根本義を示して、其信念の誤れる所を極力証明しようとして試みて居られるが、前に申した通り本来此考えは信念であり主観的のものだから、主観対主観では之等頑愚なる民衆の信念は動きそうにも無い。願わくば更に明瞭なる客観的実証によつて濟度して戴きたいものである。併し乍ら其れはそうとして当局に一任して置き、唯其信念が正しいにせよ正しからざるにせよ、当分其ままで依然存在を続けるらしいから、続くものとして吾人の領分内丈の対策を講じなければならぬ。

自由な活動の為に智識を求める人

次に第二種丙類に属する享樂派は、兒の有無に關係無く男性生得の多妻的活動を試みんとし、花を愛でも果の為に煩いを求める事の無いように警戒する輩であるが、純粹に之に属する者は大局より見て数うるに足らざる少数である事は自然淘汰、適者生存の大法の然らしむる所である。よし先天的に斯様な傾向のみを有する少数者が「自然の陥穽」に陥つて子を儲けた所が、斯様な變質者には子に対する責任觀念の湧きようも無く、育兒に対する父たるの義務を果し兼ねるであらうから、寧ろ斯様な傾向を有する者は其者の現在所有する生殖産兒權並びに将来に發生すべき父權の任意放棄の願ひに依じて輪精管切断の如き徹底的処置に出でる方が、国家として優生学的政策の有効なる施設となるかも知れぬ。即ちよし其様な男が切棄て御免の特權を得ても現世に於て稍より多くの自由を享樂した丈が功德で、来世に残す害毒が少なからうと見る考えからである。但し斯様な事はほんの机上の空論で、煩惱の犬を追払わんが為に男根を断ち、去勢を試むる時代錯誤が案外稀に起る所から見、又永久的生殖不能を望む正常な男が無い所から見

ば、之等の享樂至上主義的傾向も、青年の青春期に起る動揺中の厭世自殺慾突発と同様に、一種「個体発生は系統発生を反復する」式で本能の一次的先祖帰りの様であり、子を厭い乍ら其れを儲けて善良なパパになり終る例が多いのであるから、今日の様なあてにならぬ避妊法ならば之等の一次的享樂主義者に授けても、国家社会は益こそあれ、少しの損も無い筈である。

即刻実行の必要は無いが知って安心を求めたい人

終りに一般未婚者の事になるが、当代の如く世智辛い世の中ではよし学校を出ても急に妻帯も出来ず、極く少数のお坊ちやんの外「妻を持つ贅沢」は許されて居ない。所が積極派と消極派とが約二対三の割であり（之に関して具体的報告は他に譲る）、青年学生の百中二十は既に性交の経験を有し、三十は機会あらば性交を経験したき好奇心を保留しつつ或は積極的或は消極的純潔を保留して居る。

然るに心神共に成熟した青年が既に生理的成人を遂げ唯文化的成人の不十分な為に未婚である場合、昔の如く七歳にして席を同じうせずであればいいが、電車に乗り活動写真（画）の門を潜りカフエーの卓にもたれる場合もあり、不測の危険に対する警戒を為すは当然でなければならぬ。即ち修養努力によつて強め得た理性の力と雖も、両性の接近其度を過ぎた時に盲目的本能の狂暴に蹂躪されるのが常法であり、八犬伝（曲亭馬琴作『南総里見八犬伝』）の犬塚信乃乙女を諭して退けるなどは架空の話である。無論「君子は危きに近寄らず」と自重して居たいは山々なれど、飯を食わんが為には人の中へも出なければならず、女タイピストと席を同じうせずと頑張つても居られない。斯様な場合に於て性交無経験なる未婚者が万一の危険に処する策（よしそれがあてにならぬ法であっても、あてにならぬ事丈でも知る事が必要）を具えんが為に質

問するのは当然であろう。但し有經驗者の中で娼婦に赴く者は性病予防法こそ求めるが、避妊法なぞと糠味嚼臭味あるものには興味を有して居ない。娼婦以外の婦人と直接交渉を現に有して居る者は尚更避妊法の智識を要求して居る。此要求も亦至当であろう。

熾烈な智識慾と社会連帯の始まり

斯様に見来れば、諸種の男子が避妊法の智識を求めんとする要求は熾烈であり、如何なる妨害と強迫と教訓を以てするも到底其要求を圧迫する事は不可能である。夫々の場合に於て其当然の度を異にし、切迫の状態に差があるけれ共、斯かる智識の要求は男子側の産児行為に就いての連帯責任の自覚が文化生活充実に伴うて鮮明となり来つた結果と見做す事が出来る。吾人の社会連帯の意識が、自己より出発して性交行為の参与者に連絡を發見し、更に進んで未だ来らざる次代の人類の一員又は数員に対する責任感を喚起するに至つた此一般的現象は、我日本の心有る為政者、先覚者の歡迎すべき事であるまいか。

享楽本位の避妊が婦人の間に行われるか

更に一方に於て考慮すべきは婦人側の状態であるが、男女本性の生物学的相違により、あらゆる啓蒙運動と現状打破の合理的、秩序的実現は皆男子に始まって居る（バスチーユや米騒動の如きは唯婦人の発作により導火された丈である）。今日の新マルサス主義にしても新真婦人会の如き一部少数の内紛に忙殺されて何等実行力無き山の山人種はあつても口さきばかり、一般女性は低級婦人雑誌と新聞小説のセンチメンタリズムに其日を送つて居る今日、当局は上流婦人が避妊法の習得により容色を保ち享楽に耽る為に

濫用らんようされる事がないかと憂慮されて居るが、果して上流婦人の多数がよしサンガー女史の小冊子を読んでも之を實行し得る丈だけの科学的智識しな否態度を有して居られるか、予は大いに疑う者である。彼女達が巨大の産を有し乍らまが、其或者は不妊であり、或者が子を有する事乏しいのは、彼女達の自覚ある避妊行為によるのではない。自覚の無さすぎる為に配偶者を経て来た外来の理由と又彼女達の無為及び栄養過良に基づくのである。之等の婦人に対して憂うるは頗る親切すじやうであるが、尚他なほに幾多憂うべき大問題がお膝元にゴロゴロして居るのである。

眼前の事実と隠蔽によつて起る弊害

扱さて民衆の避妊智識の要求は斯様かように昂たかまつて来て居る。其れが当然であるか否かは云わずにおいて兎に角猛烈なものと其現状を述べたのであるが、供給の側は全然密閉されて叩たたけ共開かれず、開かれぬ為に種々な現象が起つて居る。予は斯様かように此智識普及の遮断隠蔽は政府にとり何等益がなく、却かえつて諸種の害毒を生ずる源となつて居ると思ふから、次に其理由を逐一述べて特に専門学者及び医師の考慮を煩わづらわし、間接に賢明なる当事者の参考に供したいと思ふ。

前述の通り、次の様な事は疑うべくも無い事実である。

一、現代日本に於て実行可能なる避妊法は奏効頗る不確実である。即ち奏効比較的適確な法は到底実行不能である。

二、此事実を民衆に明白に正しく知らす事は禁じられて居る。

三、民衆の此智識に対する要求は、此遮断隠蔽の嚴重さに正比例して熱烈且一般的になつて行く。即ち

隠蔽いんぺい程挑発的なものはないから、一層熱烈に要求する。斯か様に智識ちしきの需給關係きんきつに不平衡ふへいこうが起るから、上述の三事実の附随現象として第一に、

四、避妊法に関する正しい智識の欠乏の結果として、種々の憶測が生じて、いかにも何所どこかに奏効確實の妙が秘藏されて居るかの様に、一般民衆ぼく許りでなく医師迄まで思い込む様になる。

過日サンガー女史来朝に先んじて日本の朝野に異常の興奮が生じた事は、即ち此何どこか秘法もつたを齎もたらし来つて其れが宣伝普及されたならば、明年にも我日本の出生率は俄然減少するに相違そういないという予感が、内務当局許ぼくりでなく民衆の中にも力を占め始めて、之が群集示唆しそとして更に冷静なるべき専門家に迄作用し、かの大正黒船騒じやつぎを惹起した次第。其れが又影響して予の如ごとき者に迄余波まごが及んで来たのは、蓋けだし或智識が特殊階級の独占に歸し、其階級は階級自身の利益の為に秘藏し又殊更ことさらに其神聖化に努力した為、智識其ものの墮落、退化、腐敗を生じかけた際、他の類似品の普及、大規模輸入の喊声かんせいにおびえた如ごときものである。予は敢あえて医界の諸賢に苦言を呈する僭越を試みる、曰いわく「依よらしむべし、知らしむべからず」の時代は医界おひに於ても亦過ぎ去らんとしつつあると。即ち日本の医学が多くの人の号するが如ごとく真にドイツのそれの罣を摩する為には、医学の基礎智識（新薬の名前や花柳病性病）病理の広告でない）のヨリ多くの民衆化とヨリ少ない手前味てまえみ噌ぞとお祭り騒まじりぎとを必要とする。

予が前に逐一紹介批判した避妊法を調べて後「明けて口惜くやくしき玉手箱」の感を抱くのは、民衆ばかりでなく内務当局ばかりであるまい。医師にして新智識撰取に熱心なる人も亦「此小冊子に含む所の事は医界周知の事で何等なんち新發明も無く、極めて常識的である」と云うた。之はサンガー夫人に対する幻滅悲哀の叫びであるが、此専門家をして尚天なほの一方に超常識的の秘法あるかの如ごとき期待を抱かしためたのは、平生自分

達が俗衆に対して斯様な期待を抱かした習慣の惰性であるかも知れぬ。又自由討究、自由発表を阻まれた学界沈滞に附随して起る一種の病的心理であろう。

扱て上述の如き民衆の憶測と要求とに附け込んで次の如き事実がある。

五、避妊の「秘法」追究の一般的好奇心に附け込んで怪しげな書籍・器具・薬品等が官憲の許す限りの範囲で思わせ振りタツプリの効能書を添えて続々市場に現れ、人格高潔な学者の潔癖の為に忌憚無い批評を受ける心配も無く自由自在に横行して居る。

之は新聞広告と都市の或特殊区域に近い薬舗に就いて調べるならば誰にもすぐ明瞭にわかる事実である。ドイツ製のシクロという性病予防用軟膏の能書には第一の「性病予防の秘訣は疑わしき性交を絶対に避くるにあり、而して本剤の効用は絶対的のものに非ず」と正直に断つてあるが、我国に行われるものにはまだ斯様に淡白な告白は見難いようだ。

京都鴨東某薬舗主人談「当店で売る種々の器械や薬品は表面何の役に立つかわかりません。用法と目的がわかつてお客に明瞭に教えられる様なものやったら、お上から風俗を紊すものとして発売を差止められます。買う人でも貴方みたいに研究の為に鉄面皮な人は別で、大抵誰でも用法も何も聞かずに唯薬の名を云うて金をおいてコソコソ帰ります」。

予の知人大学生三名の一人は他の店に同様の採集を試み、其或物を先ず購うて用法を訊さんとしたが、他の顧客の邪魔になるという理由で忽ち店から追払われた。

性病予防薬の作用は接触面及び其附近の微生物の撲滅を目的とするものであるから、専門家以外の人でも少し推理力の発達して居る人ならば、直ちに其能書の隠れた意味を酌み取るに猶予しない。然るに斯様

な物を一々検査する機関が無いし、騙だまされても泣寝入りだから、能書のうがきは書き放題、新發明らんせうは濫造らんぞうの仕放題。悉く詐欺さぎと云われぬとしても、兎とに角かく継続的詐欺取財さぎを犯し得る要件が完全に具そなわつて居る次第である。

此弊害の矯正法と徹底的啓蒙

以上は簡單なる事實であるが、之等の相互關係に就いて予一個の解釈を下すならば、避妊法に対する民衆の当然なる智識慾を阻止したが為に、種々斯様な社会の病的好奇心と悪貨の横行とを惹起じゃきしたのだと思う。即ち当局は目的とする人口増殖の実現の為に避妊法智識の普及を絶対に阻止せんとして、却つて其目的とは反対に民衆の不健全な好奇心を過度に挑発し、似而非智識の普及横行を来し、しかも性病の蔓延を防ぐ事も出来ず、従したがうて婦人の不妊症続出を予防も出来ぬ有様では、目的とする所と結果と全然背馳はいちして居る次第である。

然しからば如何いかにして此当面の問題に処して我國民の社会的健康の標準を高め、社会的能率を高め、一般の幸福を増し、社会的不安を軽減し、又文化民族として中外に其質と数を誇り得る者となり得るかは、勿論もちろん幾多の策もあるが、其一策としては今目前に現存するが如き不徹底愚劣極まる性的隱蔽主義、否事いなこと勿れ主義を断然撤回し、民衆の当然なる智識慾という大勢に順応し、自由討究、自由発表により智識的悪貨即ち文化的不渡り手形を社会より驅逐し、以て純正なる智識を普及するより外は無いのである。

斯か様にした方が得策だという悠長な問題でない。是非遅かれ早かれ斯様になるといふ必然の事で、唯此変化が来る事が遅ければ遅い程弊害が多く蓄積し、又局面転回に際して多くの精力浪費と多くの犠牲を伴うであろうという事を予言しておいて確実である。斯かく論じ来るに於て、我等の賢明なる為政者は此切迫

せる情勢を看破し機宜の処置を執るに決して遲鈍でない事を、予は確信して疑われない者である。

自覚の上に建てらるべき優生学

「依らしむべく知らしむべからず」の時代は全く過ぎ去った。今や徒らに眼を逆にして往古の賢哲の善政（換言すれば Enlightened Despot の恩恵）の下に衆愚が平和な無自覚を楽しんだ時にあこがれるも詮無いわざである。現世改善学 Euthenics と来世改善学 Eugenic の上の処置に於ても、立法的手段に拠る劣種淘汰（先天性犯罪者及び精神病者の去勢や卵巣摘出の如き）の外に、民衆各自の自覚に基づいた智識と責任觀念との上に建てられた社会的健全 Social Well-being なくば其目的の実現は到底不可能である。例えば軍陣衛生に於ける性病予防撲滅の如きも、威嚇と拘束と処罰とを以て多くの効果を挙ぐる事能わずして終に兵員各自の智識の充実・趣味の洗練・自重心の発達等に訴うる方が有効な事を発見したのである。一般社会の性病予防の問題にしても、

「政府は之等病症を防止すべくあらゆる処置をしたにも係らず、青年男子の罹病数に於て、又統計上に於ても何等の影響も現れなかつた」秦佐八郎博士談 G. Corbett-Smith, A. (1919) : The Problem of Sex Disease, 2. Ed., p. 6, London.

のではないか。然らば民衆の体質改善に於ても亦民衆各自の思慮判断 People's own discretion に基づいた適當の処置を欠いたならば、如何に天下りの善政と名法律と賢明勤勉なる当局者あるも、其目的の実現は不可能である。

啓蒙は先ず智識階級から

此所に注意すべき一つの点がある。或人曰く、民質改善の為政府が弱者淘汰の必要を認め、又自発的には自己の生計維持の必要上から産児制限を行いたいと思つて居る「賤民」には産児制限を説かずして却つて生計豊かにして「遺伝質優良」なブルジョア階級に此智識を授くるは、享樂慾を助長し「国民たるの義務」を怠らしめ「風紀の頹廢」を生ずる結果を生ずるから、此種の宣伝は絶対に禁すべきであると。予の見解によれば如何にもそうお考えになる方があり、禁じ得られるものならば、隱蔽し切れるものならば、やつて御覧になればいい。但し目前の「細工は粒々……」仕上げの結果は前述の通りでないか。然らば大勢に従つて其風潮に乗じて策を行うより外はあるまいと思つう。

公けに産児制限を行うて尚人口増殖するオランダもあれば、公けに禁じ私に盛んに行つて居るフランスの人口は漸減して居る。人口増殖の勢いは其民族固有の發展エネルギーと他の多くの原因によるもので、産児制限の存否如何は實際に於て人口の増加減少とは没交渉のものと見る外はない。

だからヨリ多くの強壯なる壮丁（軍務に耐えうる成人男子）を求むる軍国主義者が、徹底した産児調節によつて其望みを達する事が出来る事は、論より証拠、オランダに見ればいい。サンガーの宣伝は黒人や日本人相手にするのはへんだなぞといやみを云つと、却つて自分達の平生の宣伝振りの種明かしをするように当るからお慎しみになつた方がいい。

ヨリ多くの強健な労働者（但し少し賢明過ぎ自覚があり過ぎるのは玉に疵だが）を求める資本家も亦、斯くの如き民族保健の適切手段を閑却するのはうそである。

其所で「賤民」共に優良な子をうませるにしても、前述べた通り、最早天下りの有難い処置許りではお上の恩恵が徹底しない。多少共有難さを弁へる為に啓発せねばならぬ。其れをする為に先ず智識階級の啓

発が先決問題である。物の順序は斯様になるより外はあるまい。

早婚の可能と晩婚の害

反復して申した通り、今日日本で実行可能な避妊技巧は不正確である。研究者として更に適確なる法を工夫する必要である。若し斯様なものが発見された暁には青年男女も相愛の配偶者を発見した時、自身の糊口の法さえたてば何時でも安んじて同棲生活に入る事が可能となり、従つて順当な家庭生活が早く始まり永く継続され、又今の如き不自然な晩婚と之に伴う売笑(春)制度の隆盛が幾分なり共減少する筈である。斯様な自然な新時代の性的生活の到来の為に、吾人は努力せねばならぬ責任を感じて居る。

批判であり宣伝でない

斯くの如くサンガー夫人の家族制限法を批判した上、尚彼女の来朝に附随した諸問題と之によりて暴露された世相の諸方面をありのままに述べ、更に斯様な情勢が迫つて如何なる発展を試みるに就いて若干の予言を試みたが、予は批判を試みた丈である。即ち眼前の事実がかくかく斯様であるを述べ、将来はかくかく斯様にする外はあるまいとか、かくかく斯様になる外はなからうとか予言した次第、申す迄も無くこう、しろ、とかこう、したが、いい、という宣伝ではない事を特に附記してお断りしておく。

尚客観公平を期しても事実に対して観察の誤謬も起り得る。尚又予言に就いては見地の高低と見解の広狭によつて「こうより外はあるまい」と予が思い込んで居ても、其れより外の事も起る事もあり得るのだから、一応私見を述べて大方諸彦の叱正を仰いで見る。全班を通読する事無く一部のみ抜出して唯感

情的の攻撃をするのは前も以て御免を蒙もつておく。

(一九二二年四月十七日脱稿)

自説大要

- 一、サンガー女史の述べた避妊法は医界の衆人公知の事柄許ばかりで何等なんら「超常識的秘法」も無い。
- 二、洗滌せんじょうと子宮栓べっさリの使用の組合せによる避妊法は比較的奏効適確であるが、米国式家内設備と科学的態度なくしては実行困難である。
- 三、膾座薬ちつざやくによる殺精法は実行可能であるが、奏効極めて不確ふたしかであり、サンガー女史の如く之これに過當の信用をよせる事は早計であり、又種々の困難と危険が起る。
- 四、女史携帯の器具類は米国一流に徹底した近代科学の応用と機械力利用に敬服するとしても、其ピカピカさ加減に正比例して能率が上るかどうかはすぐ云えぬ。
- 五、吾人が本能を支配し得る理性を具そなえ、事を未然に知り得る科学を有して居る以上、人間社会に於ける適者選択を自然の運命に任ずるのは血と肉と涙の濫費らんびであるから、思慮分別に基づき出来得る丈だけ早く淘汰を人為的に行うは至当である。
- 六、又吾人の感情を無益の殺生せつじょうや生命エネルギーの濫費らんびで荒ませたり又残虐に馴れたりせぬ様に、精々早く(即ち多細胞生物にならぬ内に)精子を淘汰するのも吾人の仁心と惻隱そくいんの情に対して必要である。
- 七、内臓寄生虫の駆除に駆虫剤を服し、流感予防の血清注射を施し、キニーネでマラリア病原虫を退治し、サルバルサンでトレポネーマ・パリダを殺すが医学上当然ならば、殺精による避妊も当然であり、決して自然冒瀆ぼくでない。

八、之等の理由から狭義の産児調節即ち妊娠予防は必要だから、拙劣なる方法の改良と適確なる方法の発明に努力すべきは医学者の責任である。

九、既に行われて居る避妊法によって起る危険というのは大抵（中絶性交は除外）独断説から来る虚喝であり、危険だという科学的実証はない。

十、智識階級の男子が避妊法を知らんと試みる事が、今の世の中で頗る普遍的に起り且又其追究は猛烈である。

十一、此追究者を分類して、即刻実行の必要は無いが知っておいて安心を求めたい人（第一種）、学ばねばならぬ人（第二種甲類）、学ぶ必要があると自信して居る人（第二種乙類）、自由な活動の為に学ぼうとする人（第二種丙類）の四種に大別する。

十二、知りたいという慾の起りは、へり放しはすまぬという責任観念と、後のいざこざがうるさいという利己心などがあるが、要するに文化意識の一形式であり、斯様な念が一般に萌して来た事は社会として慶賀すべき事である。

十三、婦人の智識慾を著者は判断する材料を有しないが、享楽本位で上流婦人が避妊法を講ずるなどとの心配は横文字の本に書いてある丈の事で、日本の上流婦人がそんな頭があるか疑わしい。

十四、猛烈な追究慾に対してひたすら隠蔽一天張りで押通そうとすると、却って不健全な好奇心が挑発され、これにつけてこんで悪貨の跋扈と詐欺師の横行と性病の蔓延があり、自由討究、自由発表に生命を有する学界迄が其余波を受けて事勿れの沈滞が生じる。

十五、之等の弊害を去って民質の改善を計る為には、断然徹底的啓蒙政策をとるより外の策はない。其

決断がおそければおそい程仕事が面倒になり又弊害が昂じて来る。

十六、此論文は純學術上の研究と批判であつて決して宣伝でない。即ち純學術的見地からサンガーの所説を忌憚なく批判した上、其説に就いて日本の現状は「かくかく斯様である」とありのまま述べ、更に將來に就いては「かくかく斯様になる」とか又「かくかく斯様にする外はあるまい」と予言を試みた丈の事である。(終)

Friedrich Nietzsche : Menschliches Allzumenschliches (『人間的な、あま(り)にも人間的な』) から

「社会の革命を志す者を分けて二種とする。一つは革命家彼等自身の為にか求めようとする者、他は彼等の子孫の為に何かを求めようとする者である。後者の方が遙かに恐ろしい。即ち私心の無い自覚と信仰を有して居るからである。前者は買収される事が出来る。上にあつて権力を握つて居る者の所有する財と策とは此買収を遂げ得るに足る。革命家の目的とする所一身の利害を離るるに及んで危険を生じる。一身の外なる利害を念頭に置くところの革命家は、現存社会の擁護者をすべて皆一身の利害に執着するものと見做し、彼等自身の地位を其擁護者連の上に置く事が出来る筈である」。

新マルサス主義に関する英語「通俗書」解題

——京大性学讀書会に於ける抄読紹介の報告——

大戦によつて大打撃を受けた欧米諸国民衆各個人は、物資の欠乏と其他の経済的不安に基づく生活難に脅かされて、もはや従来じとの如き無制限産児を継続する事は不可能となつた。社会全体としては健全且優良な青年を大砲の餌食えじきに惜し気無く献じ終つた揚句、其反面に於て社会的劣者の繁殖力旺盛なるに困り果て、為政者も何とか方法を講じたいと考えさせられて居る。此際優生学的に新しい色彩の加わつた新マルサス主義の勃興、普及するのは当然の現象であるが、之にも大戦が破壊し去つた旧来因襲道德の廢墟の中から人性力説の新しい性倫理のうまれ出でんとする一つの徴候を認める事が出来る。斯様な状況の中に新マルサス主義是非の著述が続出するが、其内特に専門的なものは既に掲げた。其余に民衆一般の智識慾を充たす為に多くの通俗書が現れ、特に英語で記された物は盛んに我国にも輸入されて読まれて居る。所が其書の学問的価値が読者に充分に會得えとくされない事もある故、案外つまらぬ書が珍しそうに暇つぶしに翻訳されたり、又は価値多い良書が「通俗的」の名の下に専門家からいわれない輕蔑、冷遇を受けて居るようだ。其故今此所に予が最近に目を通した本の中で特に日本の読者に、得易い、且又親しみ易い英米のものを列挙し、簡単な内容紹介と批判とを試みる。其れは当然読まらるべきものを推奨し、又一面「横文字で書かれた愚書の世迷い言」の為に金と時とを浪費せぬ様にと、脳力節約を目的として居る次第である。

(1) (1917) : The Case for Birth Control. 一五二頁。

避妊法智識の普及を妨げる為に存して居る既存法の条文(“Comstock Bill”の一節)に関して立法官の考慮を求める為に認められた陳情書で、

第一章 序論

第二章 諸国に於ける産児調節の由来と実行の現状

第三章 人口と産児調節

第四章 乳児死亡率

第五章 妊娠による母の死亡率と病症

第六章 家族膨脹を避くるに用いらるる有害な方法

第七章 売笑、白痴及び生殖器病

第八章 其他の伝染病と窮民

第九章 結論と大家の意見

の項に分け、何所でも有勝ちな法律家の生物学的常識の欠乏に対し、親切に噛んで含めるように、事実と統計表と大家の意見とを掲げて、一目瞭然たるように、簡潔にしかも内容豊富な纏め方がしてある。表現の仕方はポピュラーであるが、内容は決して「通俗的」でない。但し欠点を強いて探せば、一九一七年迄の事丈で其後の大変化が之丈では知る事が出来ない事であろう。

(2) (1922) : Woman & the New Race.

之は既に邦訳が出て居る筈、婦人自身が妊娠調節の事を鋭く反省する為に書かれたもので、事実を知ら

んとする学者に読ますものでない事を諒とせねばならぬ。一般に女の書いた物はこまやかな繊細な情にみちあふれて居て、読者の情に訴える所が多いが、之が其長所であり且又欠点であつて、わかりきつた事(専門研究者にとつて)をくどくどと引延ばして書いてあり、可成忍耐強い男でも、ともすれば苦しめられる事がある。一般向きとしては其れもやむを得ないが、ドイツの Meisel-Hess イギリスの Marie Stopes 皆予の眼から見れば斯様な長所と欠点とを見出し得るのだ。併しサンガー女史に於ては此特徴が比較的乏しく、女性固有の鋭い直観が適度の感情と配合されて、科学的に、比較的簡潔な形式を以て表現されて居るのに感服する外はない。

③ (1922) : The Pivot of Civilization. New York. 二七九頁。

H. G. Wells の序文。前半には主として U. S. Department of Labor : Children Bureau. の Infant Mortality Series を根拠として、無知な母達が徒らに産み、徒らに殺して居る実状をマザマザと如実に描写して、婦人の自覚を促して居り、此現状に対する所謂慈善事業は単にブルジョアの気休めや暇潰したるに留まらず、更に白痴者、先天性犯罪者の増殖を図る点に於て、一般社会に対して積極的に有害且残酷な所業だと痛棒を下して居る。

後半では、或一派の社会主義者特に正統マルキシストと自称する者が、此産児調節の企ては無産者の生活割に楽にするから、却つて当然来るべき痛烈な階級闘争の到来を遅からしめると信じて新マルサス主義に反対するのに対し、断乎として産児調節が今の無産者にとって又来るべき社会革命にとって必要な理由を挙げて居る。即ち無産者の無調節産児は自覚勃興の力を欠く愚民を増加し、徒らに卑屈不徹底な裏切者と罷工破りと中腰者とを増す許り、無産者の戦闘力は決して数の増加に正比例して加わるものでない

事を主張し、併せて従来のマルキシストが単にパンの分配のみを解決すれば無産者の Millennium (一年期) が来るかの如く思うて居た事に対し、新時代の実現はとかく経済的要件のみを以て機械的自動的に遂げ得られるものでなく、色食の二大懸案中孰れを閑却する事も出来ない。将来の社会に於ては自由人として一半たる女の立場は尊重されなければならぬ。男女両性の同格にして異種たるの本性 Sexuality から女性の自由産児権の主張即ち産児調節が将来の文明の枢軸となるべきものだとして結論して居る。あの女らしい、やさしい女史にして此説あるかと驚くような堂々たるもので、評者は因襲的、不徹底な性教育の徒勞を罵倒する点に於て特に痛快を叫んだ。蓋し情理を尽くし且有益な独創的暗示に富む此書は、彼女の説に同ずると否とを問はず、必読のものと言うても過言であるまい。

(4) (1922) : The motherhood. London 6s. net. 一四四頁。

世のあらゆる妻と娘の為に記された本で、母として当然抱くべき責任の自覚から産児調節の必要な事を、やさしく叮嚀に説いてある。無垢の処女が顔を赤らめそうな性智識、技巧には全然触れてないから、よし日本の女学校で訳読の教科書に用いても別に差支えない程のものである。序文は性学者 Habelock Ellis と経済学者 Harold Cox が書いて、女達の心を強からしめるように重石が利かせてある。宣伝者なら参考によむべく、学者ならまず読む必要がないが、女子大学に通うて居る娘によませる必要がある。

II Marie Stopes の著書

此著者の有する肩書 Doctor of Science, London ; Doctor philosophiae, München ; Fellow of University College, London ; F. R. S. L. ; F. L. S. び知れる通り、彼女は生物学の大家であり特に化石植物

学に通じて、嘗ては東京の小石川植物園にも来て材料を集めた事もあり、日本紀行や能に関する著述もあり、其他劇や詩の創作をも有する程の趣味の人である。女史を知る或人の印象では多少神經質な理想家だというのが、斯様な人格の表現は次に掲ぐる有名な三部作の隅々に迄行渡つて居る様に、知らぬ者にも感ぜられる。アメリカでの初婚は失敗に終つたがイギリスに戻つて性改革に於ける同志 Humphrey Verdon Roe 氏と結婚し、夫妻相携へて 61, Marlborough Road, Holloway, London に一九二二年三月、初めて The Mother's Clinic を開き、直接無産者婦人を相手に産児調節の具体的知識を普及する為に努力活動して居る。尚一方 President for Constructive Birth Control & Racial Progress として花々しく論壇に陣を張つて宣伝中である。

サンガー (マーガレット・サンガー。ア) 女史の著書とストープス女史のそれと比較して特にイギリス、アメリカの国情の対照を發見し得る点は、アメリカ合衆国では例の Constock 箝口令あるが為に前者は公刊書に避妊技巧に就いて一言も云う自由を有せず (秘密刊行物たる Family Limitation は例外)、唯社会的に取扱うて居るに反して、慣例を重んずる「常識的イギリス」ではストープス女史の生物学的立論を拘束する法律も無く、後者は女性の Decency (良識) を傷つけぬ範圍内に於て自由無礙に「閨房の秘事」を取扱うて居る事である。尚一つの対照は前者が露骨なマルクス主義的色彩を現わして居るのに対し、後者は我有島武郎氏の如く智識階級の一員たるにふさわしい聡明さを以て、階級意識を精々ばかし乍ら啓蒙事業に与つて居る様に見受けられる。

斯様にして前者の公刊書は大体として医学には無関係であるが、後者の作品には既に世に認められた性智識以外に「何だかそうありそうな氣持のする」種々の仮説が可成大胆に述べられて居り、臨床医家も性

智識に関する婦人の心理を推測するに有益な教訓を得るであろうと思われる事が多いのが其特徴である。

(5) (1920) Married Love. 9th Ed., London. 一八〇頁、二円七十銭。

此三部作の中で之が最も世間を騒がしたもので、初版(一九一八年三月)以来版を改める事九回、出版部数は一九二二年十月迄累計十六万一千部に登って居る。訳は既にフランス語、ドイツ語、オランダ語、デンマーク語、スエーデン語にある。之迄 Havelock Ellis という巨星はさておき、其余に性学的に何の見べき物を有しなかつた「品行方正、人格高潔」なるイギリス人が、今俄に斯様な画世紀的(しかも女性自身によって書かれた)貢献を得るに至つた事は一種の奇蹟であるが、此書が激烈な非難を受け乍ら終にブルジョア・イギリスの上下に行渡つた事は、戦争の爲し遂げた思想革命に於ける興味ある一事実である。

巻頭に英国派生理学の重鎮 E. H. Starling 教授が推讃の辞を書いて居る事が、まず吾人生物学研究者の注目を惹く点。「若き夫と其他恋愛結婚をしようとするすべての人」の為に、結婚前の女性の微妙な心理から始めて、結婚生活の中の女性心理を科学的に且慎重な筆で描写し、女性に於て特異な表現形式をとる性愛に関して、特に夫たるべき男性の理解同情を促さんと試み、従来の無知の為に起つた家庭悲劇やヒステリーを減ずる為に、夫婦の相互調整の必要を説き、詳細其実行法に就いて静かな閨のさざめ言から抱擁やキスの様式に迄説き及ぼしてある。其所論は性学上大体に於て肯定さるべきものであり、学者、非学者の別無く一読の必要がある。此書の全訳の公表は日本で必要だが、今迄某婦人雑誌に一部抄訳を見た丈であるのを遺憾とする。伏字や抄録は本書にとつて無用である。時勢は変わりつつある、聡明な当局が其れを許すのも遠き将来ではあるまい。

著者の創見と見るべきは、女性性慾の周期性の事で、曲線二図を添えて説明してある。之は引例の内容

が不明だから一つの Suggestion と参考迄知り置くべき丈で、尚イギリス人の間丈にても一般に適用されるは疑わしく、まして環境要件を異にする我邦の女性に早速適用し得べき説であるまい。

尚女史は古い一文獻を引用して、性交に際し当事者中特に男の注意を或高遠な理想的概念に向ける事によって射精を停止せしめ、しかも健康に害無き一種の保留性交 (Cortus reservatus たるに "Karezza" の可能を説き、支那の神仙の秘法と伝えらるるもの又は道教の一部に説く所に類似したものを述べてるが、此説は俄に首肯し難い。殊に最近中絶性交に際しても、射精以前否性交開始以前に、性交慾昂進と共に尿道口より出する尿道壁及び摂護腺分泌物の一見透明な液内にも、活発な精子の存在が立証されたから、よしその秘法が健康に支障無しとするも、避妊の目的を達し得る点に於て軽々しく信用は出来ぬ。

⑥ (1921) : Wise Parenthood. The Treatise on Birth Control, 7th Ed., London. 五六頁、約一円六十銭。

之は前の続篇として既婚の者に対して妊娠調節の法を説いたもの、但しサンガー女史のもの程に概括が纏まって居ず、特にペッサリー使用に執着して居る嫌がある。巻末に附録として彼女の The Mother's Clinic の歴史があるが、注目に価する。直言するならば、此三部作の中で読みごたえする点に於ては、(5) (7) (6) の順序であり、Family Limitation を読んだ上ならば、之は寧ろ省く可であろう。

因みに本書は Handbook for Birth Control と銘がある為に、神経過敏な当局の早わかりする所となり、書店に「懇談的」に命じて輸入禁止したと伝えられて居るが、左程騒ぐ程のものとも解釈致し兼ねる。

(7) (1920) : Radiant Motherhood. A book for Those Who are Creating Future. London. 一三六頁、約二円七十銭。

若い夫達や将来の人間を創造して居る人々の為に記されたもの。適當の時を選び進んで子を儲けようとする夫婦の問題を取扱って、貞淑な女の感情を傷つける事も無くて、充分科学的に卒直な記載がしてある。

妊娠期の女の心理的不安と一種のヒステリーを男に会得させる様に述べ、胎児に対する父母の心掛けと覚悟とを固める事の要求がある。之に就いて従来、経験に基づいた智識も無く唯独断的に妊娠と定まった後の性交は医師の厳禁する事柄であったが、ストープス女史の觀察に拠れば、才色兼備の婦人の多くの告白は妊娠中に女の側から性交を欲する念が起るとの事であり、しかも子宮内の胎児に機械的圧迫衝撃を生ぜぬ様適當の位置を当事者が工夫するならば、分娩前夜の性交も無害であったとの報告を参照して、妊娠期中の性交の可能が説いてある。但し之も女の側の性交慾がある際にのみ行うべきもので、胎児をかくむ殿堂は單に男のみの要求にゆだねるべきでないと断つてあるが、實際妊娠期中性交が女によって要求せられ、しかも一般に注意さえ行届けば無害な所を見ると、無害以上更に隠れた益があるらしい。即ち臍粘膜を通じて吸収されるらしい精液が妊婦の健康に対し又胎児の發育に対し良影響を生ずると彼女は主張して居る。尚其れに関連して妊娠期中性交に於て、斯様な吸収が充分に行われる為に *Orgasmus* 終了後尚抱擁を精々久しく続けるならば、儲けた児は眉目秀麗の者になると説いてある。

斯様な新提唱の後の部分は充分立証された定説でなく、充分割引を必要とするが、之は特に将来臨床医家の觀察報告に俟つ事が多い。

訳者註 妊娠中の性交無害の説は近時ヨーロッパの医学者によつて是認されんとして居る。例、Forel, August (1920): *Die Sexuelle Frage*, 13. Aufl. S. 90, München. 欧米人は食物の關係上かなり性交慾旺盛の男が多い為か、妊娠期中性交を是認する以上に、産褥期に際して禁慾を余儀無くさる夫の難境を同情して妻たる者は夫の自慰を助けて行わしむる

もよし、斯くする事が妻をして一層夫に対する同情を増さしめ、且信頼の念を強め、夫婦の情合を深くする結果に到らしめると主張する人すひある位である。Long, H. W. (1920) : *Sane Sexual Life & Sane Sexual Living*. New York.

三 其他の単行本

⑧ (1921) : *The Control of Parenthood*. London. 約五卅。

イギリス国立出産率調査会幹事 (Secretary of the National Birth Rate Commission) James Marchant の編輯した論文集で出産率減退と産児調節とに關してイギリス当代の学界、宗教界、政界の大家の腹藏無^{ふんざんむ}い意見が網羅してある。新マルサス主義に対する世間の態度の鳥瞰^{ちやうかん}図として頗る興味が深い。執筆者の面々を列挙すれば、科学大系 (*The Outline of Science*) とらう通俗書で我邦に馴染^{なじみ}の深い生物学者 Prof. J. Arther Thomson, 王立科学協会会員 Prof. Leonard Hill, 神秘主義の牧師 Dean Inge, 經濟学者 Prof. Edinburgh Review の主筆たる Mr. Harold Cox, 女医学者 Dr. Mary Scharieb, 通俗小説で有名な Sir Rider Haggard, 宗教家側は尚一人 Rev. A. E. Garvie, Rev. F. E. Mayer, それから前述の Dr. Marie Stopes と都合九大家の顔揃いである。

⑨ Sutherland, Halliday G. M. D. (1922) : *Birth Control. A Statement of Christian Doctrine against the Neomalthusians*. London. 十六〇頁、約三卅。

医学者である丈、所論の表現形式は中々整然として居る。先ずマルサス主義の人口の等比級数的増加と食物の等差級数的増加という基礎命題が實際成立しない事を立証する為に、例を第一スエズ運河地帯であり一九〇一年十年間に行うた衛生施設の為に死亡率が千分の三〇・二から一九・六迄低下したが、之と同

時に出産率が低下して全人口には何の著しい変化も起らない。而して回教徒はコーランによつて妊娠調節を厳禁されて居るから此現象は人工的避妊によるものでないと主張して居る。次に鎖国日本も其例で、明治維新前一七二三—一八四六年の間は人口は常に二千六百万を数えて変らなかつた。斯様な期間に於て日本人が他の半開人と同じく殺見による調節を行つて居り、其後文明国となつた為に其蛮行を廢した為に現今の大膨脹を來したとは、我々イギリス人の想像する事も不可能な「あり得べからぬ」事であると述べ居る。

斯様な引例から始めて、事細かしい相関関係数の表と数字を列べたてて、出産率と死亡率との間に明確な相関関係は無く、各々「別々に食物に関係して居る許り」でマルサス主義者の所論と実際とは違つと力説してある。

それから後、種々著者自身の信ずる「確証」を挙げて、結局避妊は「貴いカトリック教会の御教え」に背く行為であると断案を下してある。但し評者には其断案に至る迄の論理がどうしても著者の信ずるが如くに辿る事が出来ぬ。それは無論評者の頭の悪いせいもあるが、一般に宗教に堅凝りの論者の癖として、論理の途中で行詰ると屹度「神の尊い教え」が飛出して来て助け舟になり、それで自分はさつさと難関を突破して断案に到達するを常とする。不信心者には此奇蹟の助け舟も役に立たぬから、やむを得ず逆戻りして無縁の衆生と諦めて引下る外はない。

之は「神の建て給うた尊いカトリック教会擁護」の一著述であるが、少し意識を試みて神を○○○○_伏字（天皇陛下）に、又教会を国家と云い直せば、満更我々日本人に没交渉な議論でもなさそうだから、今代に稀な少数意見として、且又信仰心理研究の一資料として、暇のある経済学研究者がよまれるもよからう。殊に

一般学界と没交渉なカトリック系学者の文献を探るにも多少の便宜は得られる。又前述の Marie Stopes 女史の宣伝振りの花々しいのも此著者の憤慨ふんがいに充ちた記述によって其側面観うらがひを窺い知れる。

一言で評すれば、素人が読めば非常に学術的な著述らしく思い、玄人が読めばこけおどかしの詭弁きべんと感ずる書物。

(10) Robinson, William J., M. D. (1922) : Birth Control or the Limitation of Offspring. 10th Ed., New York. 一五八頁、約四円四十銭。

此著者は医師で性的啓蒙運動にも頗る熱心な人、通俗書の著述も多く我日本の性的売文業者によって其或者は既に紹介されて居る。英語のみによって性学一般に通じようと試みる難境はお察するが、此人を大家エリスに続く祖師となすは不穩当であろう(よしエリスを元医学博士羽太銳治君や性学専門大家沢田順次郎君等とゴツタにする程の非礼でないにしても)。

扱さて此本は米国の出版法 (Obsenity Act) に触れぬ範囲内で、一般民衆にあてて妊娠調節が必要であり決して反自然の非行でない事を力説したものの、木版画で色々無知の結果の悲劇を示したなど、アメリカ式の田舎臭い所が本の体裁に現れて居る。今から七、八年前なら非常に適切な本であったろうが、併しかし今日新しい本と比較すれば通俗書として多少の光が薄らいだが、専門性学者以外の人が読んで損の行くものではない。

(11) Willis, W. N. (1921) : Wedded Love or Married Misery. London. 一八四頁、約二円二十五銭。

此本は前述のストープス女史の著述の普及に對抗して、其中の論点に種々論難を加えたもので、著者は引用書目で推察するに可成読書家らしいが、矢張特やはりに生物学的訓練を受けた人でない事は、読めばわかる

通り。オーストラリア議会の一員として十数年政界にあったと口上があるから、「愛国の志士」にして大英帝国の前途を憂いたものであろうが、表題が：「Maridd Love」をもじった所が感心しない。其所論を簡条書にすると、

一、ストープス女史は理学博士 (Dr. Sc.) であり医学士 (M. D.) でない癖に医学上の問題を云々するのは不届きである。

(二) そういう当人が元議員の癖に出しゃばるのも論理があい兼ねる。評者でも、生物学研究をやる理学士の癖に医学博士の領分に侵入するのは生意気だと、日本の衆議院議員や自称愛国者からお叱りを受けそうな気がする。

二、無差別に避妊智識の普及を試みるは有害である。よし避妊の必要な場合にも夫々適当な専門医師の指導があるから、生物学者の干渉は無用である。

三、邦家特に大英帝国の為に賢明にして健全な児を儲くるは必要である。

四、膣内に精液を残す事をすすめるのは非衛生極まる話である。且又避妊の為に食塩水洗滌を試みる如きは塩漬牛肉の不味粗剛なのに比べても有害な事がわかる。

(二) 精液を性交直後即座に除去去らぬ事は、ストープスの所説によれば、妻の健康に有益な吸収をさせる為に行うので、絶対について迄も粘液分泌物を拭い去るなどいうのではないから、此非難は当らぬ次第。尚吸収作用の益に疑いを抱いて居る評者は、今避妊の目的を以て適當の座薬を使用した時には其薬品の殺精作用を充分に行わせる為に、性交直後分泌物全部を除去去らぬ方が合理的であるまいかと考えて居る。

(三) 膣の食塩水洗滌は粘膜硬化を来す。論より証拠、塩漬牛肉を見よなどと、人体の生活組織と死後の牛肉片と同一視する様な愚論は、苟も生物学を修めた者なら、ストープス女史の如き植物学者でも相手にする程の勇氣はなからう。わからぬはオーストラリアの国会議員ばかり也、日本の衆議院議員でもそんな人はあるまい。

五、殺精の如き避妊計画を夫が知りたる時、彼は愉快を覚ゆるであろうか。

(二) 産児調節は夫婦合意の上に行われるのを原則とする。今若しウィリス氏の如き夫があつて、避妊行為を理由無く感情的に嫌う場合、して又彼の妻が妊娠を拒否せんとする際、其男は妻を強いて妊娠に到らしむるのは当然であるか。

要する所、此本はストープス女史の著書の普及に對して徒らにヒステリーの恐れをなした守旧主義者が揚足取りをする為に書かれたもので、暇潰しに読む程の価値も無い愚書である。そして、(9)の如く真正面から新マルサス主義を叩きこわそうと試みる程の蛮勇も無く、左顧右盼頗る不徹底なイヤミと泣言にみちて居る所に現代イギリスの世態を窺う事が出来る。

(12) Gair, J. P. (1921) : Sexual Science as applied to the Control of Motherhood. London. 一六〇頁、約二円七十錢。

之もストープス説反對と看板をあげた所は、(11)の分身と思われる程よく似て居て、同様に天下の愚書の一。名前丈新しく人を釣り込み、下らぬ内容で呆れさす所は我邦によくある性研究の著述の或ものによく似て居る。

一般に新マルサス主義を非とする近刊著述を特に探しても、斯様な下らぬものしか得られぬのは、蓋し種々学界、俗界の興味ある変遷を示すものと解すべきものであらう。(解題終)

所謂子宮サックと当局の取締り

本邦の市場に現れて居る「子宮サック」は、其形は大体に於て第一八頁の図のペッサリーに似て、其嚢状の袋の高さが図のよりも遙かに高い。斯様に形も違うが、其ゴム膜の品質も米國製ペッサリーの柔軟不透明なるものとも違い、多少粗剛な半透明、暗褐色の材料を用い相當の厚さを具えて居る。多分之は商人が盲目的に舶來品を模造した間に斯様に變形した物と推定されるが、斯様な器具が如何なる用途に用いられるか、予は其れを疑問として居た。

然るに最近無産者間に於ける避妊技巧に就いて豊富な觀察を有して居る、S・M氏の所見に拠れば、次の如き事實がわかつた。此器具には本来使用法を示す事が許されて居ないから、購求者の多数（特に花柳界の女）は之をコンドームに相似なる位置を執らしめ、即ちサックの凸面を膣腔内に向けて挿入し、性交を行わんと試みて大抵は其使用が享樂を殺ぐ事甚だしい為に、一回限りで其使用を断念するらしい。更に勇敢な婦人は自ら此子宮サックを前述の方向（第一九頁の図とは正反對）に凸面を子宮腔頸部内に向け、子宮孔より挿入する程の冒險を試みる者もあるが、孰れにしても觸感上快感を殺ぐ事甚だしいにも係らず、所詮斯様の物とあきらめて僅かに氣休めに此危険を冒して居るのださうだ。

今斯様な器具を市場で一般人の手に入る様にしておいて、しかも使用法附記を許さぬ様では、斯様な憶測に基づく誤用と危険が起る。性病予防の為或は避妊の為に使用の目的を明示せしむる事は、人口増殖を要求する当局に執つて容赦出来ぬ事であろうが、売る事を許す以上、少なく共其正しい使用法（使用の目的は書かせずに憶測に任せておき）丈でも附記する事を許さねば、上述の如き結果になる。取締法としても徹底且論理が矛盾して居るではないか。

(二) 聞く所に拠れば、一九三二年七月警視庁衛生課では、性病予防を標榜する座薬、錠剤、クリーム等の製造者

及び輸入商を召集して、種々尋問を試みた後、従来の避妊可能を暗示する様な文句を省く事を厳命したそうである。併し其命の後でも、或薬には明瞭に Antikonzeptionelle Mittel (避妊薬) と書いてあるから、厳命も我等の科学的なドイツ語に迄及ばぬと見える。

附記。余談ではあるが、文化史上興味有る一事件が大坂製コンドームに関して起つた(前述S・M氏談)。ロシア革命勃発と同時に対ロシア輸出がはたとやみ、之迄大規模にロシア向け特製コンドームを製造して居た商人は、滞貨を控えて苦心慘憺の揚句、件んのコンドームに水素瓦斯を充たし、十日戎の縁日に大売出しを試みた所が、其怪奇な形状と又特に安い価が大阪人の歓迎を招いて即日滞貨を一掃したという奇談がある。吾人が屢々鉄道列車内で遭遇する呼売商人の廉売するゴム風船の或ものが円筒状であるが、斯様な円筒状風船の流行を溯れば矢張りロシア革命以後の事であるから、此形の流行の始まりは彼の十日戎に早變りの芸当を演じたコンドームであるらしい。日本の汽車の中で密売される「お子供衆へのおみやげ」が斯くロシア革命の記念であるとは、実に世相の一ふしに吾人の生活の国際的な事が窺われる次第である。

● 「サンガー女子家族制限法批判」（山本宣治著、『山本宣治全集』第三巻、汐文社、一九七九年二月）所収。

- 旧かな遣いは新かな遣いに、旧漢字は新漢字に改めた。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- 理解を助けるために割注をつけた。
- 外国の地名はなるべく通行のカタカナ表記に改めた。
- PDF化には`ETEX 2ε`でタイプセッティングを行い、`dvipdfmx`を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>